

神戸大学
教養部

広報



No.64

昭和59年3月30日

教養部広報委員会

目 次

—巻頭言—

新入生諸君へ……………教養部長 長谷川 正 知 (1)

—退官の辞—

退官に際して……………向 井 利 昌 (3)

教養部を去るに当って……………請 川 高三郎 (6)

—着任の辞—

UNH PROFESSOR VISITS KOBE UNIV.
……………Edward Francq (8)

—特集・海外研修より帰って—

中国に1年……………中 川 正 之 (10)

ワールドカップサッカー・スペイン大会
とフラメンコ・闘牛……………五 島 祐治郎 (12)

ハイデルベルク訪問……………角 田 謙 (15)

マドラス——ニルギリ——コーチン
——南インドの旅から……………野 村 亮太郎 (17)

滞米日記抄……………横 山 雅 彦 (20)

不思議な国アメリカ……………水 口 志乃扶 (23)

被告になったネコゼ君……………もり はるひで (26)

20年ぶりのモスクワ……………小 野 理 子 (28)

ゲッティンゲンへの車中にて……………大河内 了 義 (31)

米国南カリフォルニア大学滞在を終えて……………田 中 克 己 (33)

—留学生寄稿—

「甘えの構造」を読んだ感想…………… (36)

—学年暦—…………… (38)

—教養部のうごき—

人事異動…………… (42)

学生自治会との交渉経過…………… (42)

第二課程学生自治会との交渉経過…………… (44)

部落解放研究会との話し合いの記録…………… (45)

表紙：本 田 烈 氏 (仏 語)

カット：小 倉 生 栄 氏 (図 書 館)

—巻 頭 言—

新入生諸君へ

教養部長 長谷川 正 知



今年もまた新しく多数の新入生諸君を迎えてわが教養部のキャンパスの空気は一新される。教養部に席をおくわれわれ教職員にとっては、これは毎年繰り返される年中行事の一つで、取り立てて珍らしいことではない筈である。しかし、毎年迎える正月に、歴史の流れに伴う年々の展望と期待があるように、新入生の持ち込んでくる空気も年ごとに異なり、今年の学生はどうだろうかと云う期待を伴ったある種のフレッシュさをわれわれも味わうことになる。

最近小学校から塾に通うということが一般化し、小さい頃から試験に追い立てられてきた諸君にとって、大学入試はその最終目標であったであろうし、その目標を達成した喜びは当然である。これで、試験らしい試験は事実上終わりといってもよい。これからは試験がない訳ではないが、今までのような試験のためだけの勉強といった、主客転倒を強いられることはなくなり、これからは勉強は試験のためではなく、自分自身のためにするという本来の姿になる。大学入試が高等学校以下の教育をゆがめ、学生の過重負担を招くということで、そのあり方が大きな社会問題となり、共通一次試験が実施されたりしたが、事態は一向に変らない。社会や大学のシステムが変わらず、ここである種の選抜が避けられない以上、入学試験の制度だけを少々いじって見ても事態がそう大きく変わると思われない。あたら青春の貴重な時を入試のために費すことは、もったいないことには違いないが、それも考えようで、相当の期間自己をおさえ

て、ある目的に死にものぐるいで努力するというその経験は、人生の一つの経験として決して無駄ではないであろう。不幸にして受験に失敗した諸君のことを思えば、兎にも角にも合格した諸君はこのように考えることができる。

今ここで大学入試の功罪を論じる気はないが、今の学生諸君が、小学校以来余りにも長い間、勉強は試験のためにするものという事に慣れ親しんでしまっていることが、入試の弊害の最たるものではないかと思う。折角大学に入って、はじめて試験から解放され、自由に自分自身、あるいは自己の将来の目的のための勉強ができる立場になったにも拘らず、このすばらしい身分に仲々なじめず、これを享受できない人が多いのが実情である。教養部でも履修科目にある程度の制約はあるものの、選択の自由度は極めて大きいし、自由に勉強する時間も充分ある。多くの教官の授業に対する姿勢も、今までのように、試験に良い点がとれるようにということではない。それぞれの教官の考えなり知識体系を何とか理

解させようという気持で講義をされる。このような講義は、そこから何かを学びとろうという積極的気持がなく、試験の成績だけを問題にする学生にとっては興味のないものと映るであろう。このような諸君にとっては、試験からの解放はすなわち生活目標の喪失であり、夢遊病的大学生活を送ることになる。勉強が自分自身のためのものということを実感することが大学生生活の第一歩である。これは何も授業だけのことではない。読書、交友など、大学での全生活を通していえることである。このことはいつも新入生諸君に強調することであるが、大切なことは“自覚”することであって、教えてもらえることではない。大学入学を機会にこのことを深く考えてもらいたい。この自覚があってこそはじめて大学入学の真の意味があったといえるのである。

大学では諸君は一般教養と専門科目を勉強することになるが、他の多くの大学と同様、神戸大学でも、一般教育と専門教育とはかなり画然と分かれている。諸君はまずは教養課程でいわゆる一般教育を主として受講することになる。入学に際して諸君はそれぞれ自分の専門の学部、学科を決めている。当然のことに諸君はその専門知識を学ぶことを期待しているであろう。そのような諸君にとって、専門に直接結び付かない教養の授業は期待はずれと感じるかも知れない。特に、自覚のない、卒業という就職キップを手にするだけで目標の学生にとっては、単位の取りやすさだけが授業科目の選択の基準となり、教養課程は何もすることのない退屈きまりない

ところとなる。あげくの果は遊びほうけて遂には卒業すらおぼつかなくなるものも多い。このような風潮は、入学試験のせい、高度経済成長のもたらした社会的変化のせい、あるいは大学の大量化のせい、あるいは見方であろうが、近年特に強くなってきている。

教養課程の授業の一般教養たるゆえんは、専門科目のようにそれがその人の専門とする仕事にとって必須の知識ではないところにある。しかもそれは、高等教育を受けた知識人としては必要欠くべからざるものである。専門知識だけの人間も、それなりの生き方がない訳ではないが、人間としての幅がせまく、考え方の片寄ったものになってしまう。一般教養と専門教育が大学教育の2本の柱であるゆえんはここにある。社会が大学卒業生に期待するのは、その専門知識だけではない。大学卒業生のもつ広い識見と教養に由来する能力がその大きな要素である。最近の高度技術社会においては、学卒のもつ専門知識にはむしろ大きな期待は置いていないといっても過言ではない。

現在の大学の教養部は、先に述べたような無自覚な学生を手とり足とり指導するような体制にはなっていない。この点新入生諸君の多くは当初大いに戸惑いを感じるかも知れないが、早くこのような戸惑いから立ちなおり、大学の自由な雰囲気になじんで、自覚をもって新しい出発の一步を踏みだすことを期待している。教養部はこのような意欲に富んだ、やる気のある学生諸君の期待に十分答えると信じている。 (化学)

-退官の辞-

退官に際して

向井利昌

I

私もいつのまにか馬齢を重ね、なつかしの神戸大学を去る日を迎えることになった。おもえば、昭和24年に、京大大学院の特別研究生を中退して、旧制神戸経済大学の助手として赴任してから、春風秋雨35年の年月が流れ去った。あと何年間生命が保たれるかは予想しがたいが、私の人生の大半は神戸大学で過ごしたことになる。いま、「消えゆく老兵」の追憶の糸を辿ってみると、かすかすの思い出が走馬燈のように蘇ってくる。

24年に神戸経済大学に着任したときの第一印象として異様に感ぜられたのは、当時のわが国は終戦後の占領下にあり、六甲台の学舎の西側は進駐軍の使用地域になっていたことである。六甲台の講堂、テニス・コート、プールは進駐軍のリクリエーションの場と化しており、現在の六甲台団地の場所には、進駐軍の子弟用の学校が建てられており、六甲ハイツは進駐軍の宿舎となっていた。私は、最初第二課程のゼミナールの手伝いをしてしたが、夜間のゼミナリステンの学生たちは、食糧不足のなかで空腹にたえて熱心な学問意欲をもやしていた。また、その頃は、戦災の被害の復興がすすんでおらず、極度の物資不足の時期であり、住宅事情もきわめてわるく、教官のなかでも住居難の人が多く、学内に居住したり、研究室に泊りこんでいる人も少なくなかった。私の直接の指導教授であった北野熊喜男教授（現在神戸大学名誉教授）も御家族ぐるみで学内の一室に住んでおられ、大先輩の教授であった故阪本弥三郎教授も単身で研



究室に起居しておられた。また、当時助手であった南方寛一氏や山瀬善一氏（ともに、現在経済学部教授）も研究室の居住者であった。私も、その頃、大阪市内に居を構えていたが、通勤が時間的にも不便であったので、大学の近くの家に下宿をして、研究室に泊りこんで仕事をする日が多かった。その時に私の食事の世話をしてくれた北野教授の御家族の御厚意は終生忘れえぬものがある。私の最初の研究室は、兼松記念館の二階の大部屋の東側の一角にあり、私と当時ともに助手であった新野幸次郎氏（現在経済学部教授）と海道進氏（現在経営学部教授）とが机を接していた。新野氏および海道氏とたえず学問上の議論に花を咲かせていたことが私にとって少なからぬ学問上の刺戟となっていた。その頃の学内宿泊者は、当時の用務員室にあった浴場に入浴していたが、一つの浴槽をかなりの多数人が使用するので、順番を待ちながら四方山の話をし合うものどかな一時であった。故阪本教授は、幾度もよみ返されてボロボロになっているケインズの「一般理論」によみ耽って

おられた。ある夜、入浴の順番を待っていると、一人の若い教官が、これまた順番を待ちながらヘーゲルの「精神現象論」により耽っていた。おもわず声をかけてお互いに挨拶を交わしたが、その人は当時文学部の助手陸井四郎氏（現在教養部教授）であった。同氏も、六甲台図書館の前に建てられていた木造の研究室棟の一室に住んでおられた。これが縁となって、お互いに夜の研究室を訪ねて、社会科学の問題その他の談合に耽ったものである。あの頃の研究室に泊り込んでいた若き日の生活は、今となっては限りなくなつかしい。

II

昭和25年に新制神戸大学が発足し、私は経済学部の助手になり、その年の後学期に新制第1回生の外書講読を担当したが、これが私の最初の講義であった。そして昭和26年から教養課程の経済学の講義を担当し、この講義は現在に及んでいる。（この教養課程の経済学の講義については、既刊の「広報」63号でくわしく述べている。）26年の10月に神戸大学経済学部助教授となり、30年から、私のライフ・ワークのテーマである「経済社会学」の講義を北野教授に代って担当することになり、この頃から私の学問意欲ははげしくもえ上ってきた。いささか誇張的な表現かも知れないが、「ペンとチョークを握って生涯を全うしたい」とみずからを鞭打っていた。しかし、未開拓の多難な研究領域に非才をも顧みず挑戦する精進の途は余りにも苦難にみちていた。昭和32年より、教養課程の御影分校（当時は、教養課程は御影と姫路の両分校に分れていた）の勤務となり、経済学部を併任することになったが、この御影分校で新しい先輩教官および学友と心温まる交わりをする

ことになったことは、大きな収穫であった。また、この年より、「指導教官制」（現在の「教官—学生連絡グループ」の前身）による指導学生をもつことになり、若き新入学生と、ともに語り、ともに興じて、よろこびも悲しみもともにした親交をもったことも、わたしの生甲斐の一つとなった。このグループ制も、中断されることなく現在までつづいている。35年より経済学部の研究指導生をもつことになり、専門課程のゼミナリステンの学生たちと自由に討論しながら明るいアカデミックなふんいきのなかで、研究テーマを探究していった。経済学部での研究指導は、39年に教養部所属に配置換えとなったため、42年迄で終わったが、現在経済学部教授の岸本哲也氏も私のゼミナリステンの一人であった。昭和30年前後から私の研究の中心テーマである「資本主義経済と階級構造」の経済社会学的研究もある程度構想がまとまってきて、いくつかの論文を書いたが、それらの研究を集大成して、文字通り悪戦苦闘の結果、まとめあげ、昭和37年に、旧制経済学博士を授与されたことも、その過程の精進が余りにもきびしかっただけに、私の学究生活にとっての一つの感激的なことであった。

III

38年に御影分校に、39年に教養部に配置換えされ、経済学部の併任はつづいたが、資本主義経済と階級構造の関連性についての研究成果をいちおうまとめあげてから、この研究の基礎固めと再検討をしながら、研究の主要テーマを、階級および社会的勢力に焦点をおいた社会的要因からの影響を考慮に入れた経済理論の再構築の仕事に向けているが、これまた苦難の荆の途の連続である。39年6月か

ら半年間（一年間の予定を健康を損ねて半年間に短縮）、経済学と社会学を中心に社会科学の基礎理論とくに階級理論の研究をテーマとして、チュービンゲン大学を本拠地として西ドイツに留学したことも、私の見聞を広めてくれたとおもう。帰国後40年に教授に昇任し、私も40才を過ぎる年になっていた。40年代の初めに学園を襲った「大学紛争」のなかでかなり心身をいためつけられたが、これも私の大学生活における大きな試練となった。

46年に神戸大学大学院経済学研究科博士課程の担当をすることになり、それ以後現在にいたる迄、教養部では、経済学の講義の担当をつづけながら、新しく設けられた「特講」（最初は「演習」と呼ばれていた）を毎年開講し、「総合科目」にもしばしばそのメンバーになって参加し、経済学部では、毎年大学院の講義をし、隔年に経済社会学の講義を

行なってきた。これらの講義ともお別れのときがきた。全く惜別の感にたえないものがある。

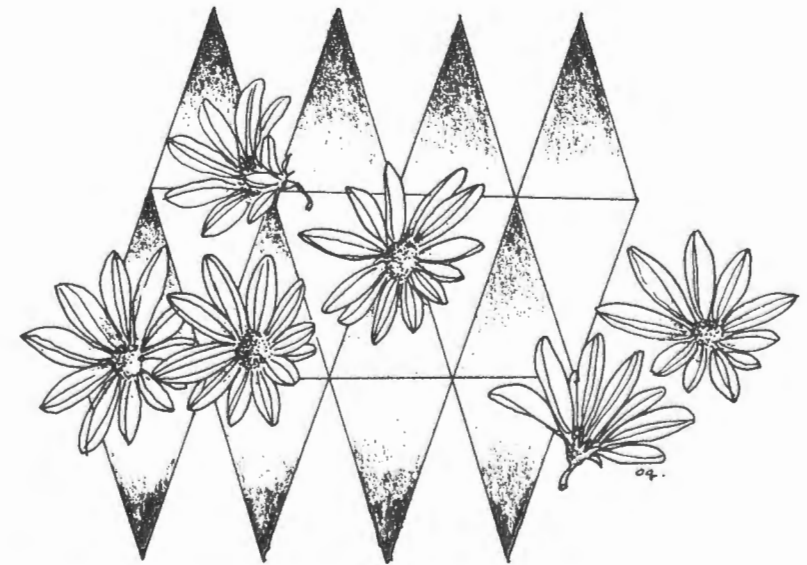
.....
おもえば35年間、風光にめぐまれた六甲の学舎で、よき先輩教官、よき学友、よき学生たちに囲まれて学究生活を過しえたことは、よろこびにたえないものがあり、また、それだけに、この学園を去ることはしのびがたいものがあるが、この学園での思い出を胸に抱いて、これからも、新しい意欲でたどたく究理の道を歩んでゆきたいとおもう。

最後に、教職員の皆様、親愛なる学生諸氏の御多幸と御健康を切に祈りたい。

髪白く六十路の坂をこえゆかん

なれど真理の峯仰ぎつつ

（経済学）



教養部を去るに当って

請川 高三郎



今年3月定年退職を迎えることになった。昭和20年に兵庫師範学校助教授として広島大学を卒業して就職、そのまま神戸大学に吸収され、神戸大学の助手として人生を出発した。それは昭和25年4月のことであった。そして、履歴を調べてみると27年6月に文理学部講師となり、御影分校勤務を命ぜられ、これからが教養部の一員となって御奉公することになったのである。私の住んでいた荒神山の近くに、もう亡くなられた富田教授が住んでおられた。富田先生は学長候補にあがる程高邁な人柄の先生であった。私に何処の学部で勤務しているのか尋ねられたので『御影分校です』と答えた。すると先生は『それはよい所に勤務された……』と仰しゃって、数名の御影分校の先生方の名前をあげられ、その御人格をたたえられ、『私は御影分校に所属することによって、人格が崇高になった』と仰しゃられて、私が御影分校の所属になったことを喜んで下さった。先生は今天国に行かれてしまった。そんなことに影響された訳ではないが、私にとって神戸大学の教養部は全く住みよい安定した所であった。勿論研究も思う存分出来た。ただ教養部に所属して所謂“頭に来る”と云ったことがかなりある。これは後に続く皆様の手によって解消してほしいものである。差別待遇がそれである。助手として理学部に所属していた頃、或教授より教養部に所属することは不利であり理学部に所属するだけで優位であるということをよく聞かされた。今でも他の有名大学の教授と話していて、それ等の人々も先の教授と同様の考えを持って

ることが判るのである。つまりその人の真価は別として、教養部に所属することがマイナスに働いていることである。このことが判って私の研究はますます拍車がかかった。私の研究テーマは浅野整環とよばれるものであって、その条件の弱いものについて考究していた。浅野先生に御意見をお伺いすることが多かった。然し、先生はテーマは下さらなかった。『私はテーマは与えませんよ。テーマを与えるということはテーマを与える人の側から云えば将来の展開も判っているのです。そんなことをしても研究ではない』それが浅野先生の御意見であった。然し私は先生とお話しして、先生が興味をお持ちになっていない方面は考えないことにした。私のテーマの様に実社会とは何ら関係のないテーマは、自分以外に誰かが興味を持っていないと、考えることに力が入らないのである。論文の書き方、学会において研究発表する、そのまとめ方、話し方まで浅野先生の御指導によった。当時、新制大学の発足により昇進のため数学の研究発表の件数も多くなった。つまり少しでも

出来れば発表するという機運が強まっていた。私は発表する前に大体先生の御意見を拝聴した。それで数学の発表は私の所属する代数分科会など全て5分間と制限されてしまった。私が発表する時、その発表の原稿、発表する講演そのものまで浅野先生が批評して下さい。5分間にその内容をきっちり述べる様に。今も私は講演は5分間と何時もしている。先生は『得られた結果を全て発表するという態度をとるな』とも仰しゃっていた。それはフランスの碩学シュバレーの講演とも関連する様にも思える。浅野先生の論文は全てドイツ語であるので、私も論文はドイツ語で書いていた。勿論、引用する文献もドイツ語の方が多かった。最近やはり英文の文献の方が多くなったので、私も論文は英語で書くことにした。テーマも浅野整環を一般化したもので乗法環なるものについて考究している。最近一緒に論文を書いたイギリスのスコットランドのグラスゴー大学のスミスさんが私のやっていることに興味を示し御協力を得ることになった。私が私の論文の別刷をスミスさんにお送りした所、『あなたの定理の別証明』としてスミスさんより手紙を頂いたのであるが、その証明が間違っていて、それより彼との文通がはじまった。よき友人を海外に得て私も楽しみが倍増した。彼はイギリスの数学界におけるホープなのである。2、3年後にイギリスに行けば彼と会うつもりである。先日、彼が御家族の写真を送って来た。その他イギリスには碩学のロブソンさんがいる。彼の論文はよく読ませて頂いた。そして私の糧とした。彼の論文の小さなミスを個人的に指摘して彼と友好が始まった。ロンドン数学会の環論のエディターである。そして世界の環論界のホープであろう。そんな友人や先輩がいる

ので私も昨年秋、ロンドン数学会に入会した。浅野先生に現在大阪市大教授の原田教授と一緒にゼミを見て頂いた。原田さんは四年生だった。私は神戸大学の助手だったのだろうか。ゼミを始めて2、3回過ぎた頃だった。私の番で私が浅野先生の“環論及びイデアル論”の或節を説明していた。或程度進んだ所で、浅野先生より“一寸待て”と注意があった。私は証明に誤りはないのでどうしたのかとためらった。先生は『君の態度には何故かもう一步ふみ込む態度が足りない。ガロアやアーベルが何故、あんなに若くしてあのような業績が出来たか考えてみろ、君の態度にはその態度が不足する』先生はそのことを1時間もコンコンと力説された。私は黒板の前に突立ったままで拝聴した。ゼミを聴いている原田さん、永尾さん、木下さん、神崎さん等黙って聴いていた。後でよくよく先生の仰しゃったことを考えて反省した。然し、何と有難いことではないか。今、数学を始めたばかりの私と、大天才ガロア、アーベルと比較して私を叱って下さった。私はこの先生の叱って下さった内容、先生の態度を終生忘れないで研究生を送って来たし、これからも背かない様に努力するつもりである。教養部の皆様の御健康と御発展を祈って、筆をおきます。本当に長らくお世話になりました。1日も早く差別待遇のない神戸大学に発展して下さい。私にはこの正月1日に胃ガンのため31才で生涯を閉じた脳性小児麻痺に生れた長女がいました。私の残りの人生30年はこの澄ちゃんのみまで活躍しようと考えています。研究活動も一部の人々によって評価されておれば十分と思っています。皆様の御健康と御発展を祈っています。(数学)

UNH PROFESSOR VISITS KOBE UNIV.

EDWARD FRANCO

The Kobe University/University of New Hampshire, U.S.A. faculty exchange program is in its second year and visiting us for 1983-1984 from UNH is Professor Edward Franco. Ed looks and describes himself as a rather average middle-aged American, whatever that is! He comes from the average mid-American state of Indiana, rich in corn and hogs, and attended secondary school in the neighboring state of Ohio. Only occasionally does his speech belie these mid-western origins. He has, for example, been known to "warshin the crik", whereas most others, if they did so at all, would wash in the creek!



Four years at the University of Maryland led to a degree in Biology. This was followed by three years in the Navy serving as Intelligence Officer in an aircraft squadron aboard several aircraft carriers. This provided his first trip to Europe. His association with the Navy lasted twenty years when he retired from the Reserve Program. These were, fortunately, peaceful years but whether this was as a result of his role is not really clear.

Two years at the University of Idaho, and three years at the Pennsylvania State University earned him advanced degrees in Biology with specialization in vertebrate Zoology, particularly mammalian behavior and ecology. He also teaches a course to 600 students a year at UNH dealing with world environmental problems. He admits that this interest is one of several reasons why he wanted to come to Japan.

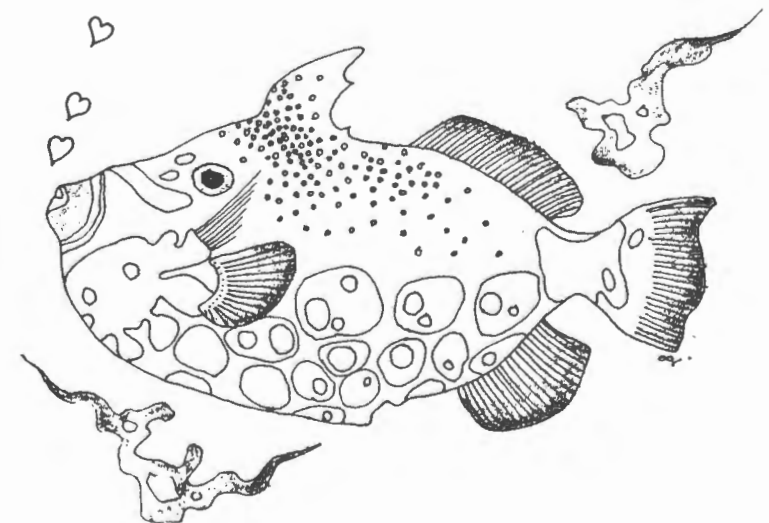
Professor Franco has worked in boys camps, with the U.S. Forest Service, and as a professional handler of poisonous snakes. In recent years he has taken students during the New Year's school break to the Arizona Desert where they study the ecology of an area quite different from the New Hampshire forests.

Professor Franco enjoys many hobbies, probably too many in his opinion, although some of these he justifies because they keep him in touch with the outdoors. A partial list includes hiking, canoeing, camping, and cross-country skiing. He also sings regularly, pulls an occasional guitar string, and has been heavily involved with community theatre for many years. Any left over time is spent renovating the 150 year

old home in the country that he bought two years ago.

The question Professor Franco is most asked in Japan is, "Why did a Biologist come to Japan to teach English?" As already mentioned, it was partly to see first hand how a very unique, small, over-populated, highly industrialized country copes with problems of land use, limited resources, pollution, and so many mouths to feed. He is also interested in the rich history and cultural heritage of this country. He hopes not only to learn more about these things but to carry the message back to New Hampshire. He is also hoping to initiate a cultural exchange program between the Kobe/Osaka area and the northeastern United States. His experiences over the last seven months have only served to increase his interest in this country and its people and he is looking forward eagerly to the excitement of the next five months.

(英語)



海外研修より帰って

この1年ほどの間に外国で研究、講義、講演などをされて帰って来られた教官が20名に垂んとしております。幾度目かの方、そうでない方と様々ですが、それぞれ、行く先ざき

での学問的また社会的な発見には刮目すべきものがあります。ここに特集を組みました。掲載順はご帰国順です。(編集部)

中国に一年

中川正之

1982年4月4日はほぼ定刻に北京空港に到着。1966年に中国語の勉強を始めて、いつかは行けると思いながら15年以上が過ぎてしまった。日本政府の全面的な出資で北京語言学院に設置された中国の大学の日本語の先生の研究・再教育機関で一年間対照言語学の授業をすることになっている。その外に最底2回の公開講座をしなければならない。中国に勉強しに行くのではなく教えるに行くという不本意かつ恐るべき現実に対しては居直りも済ませていたし(何度も!)、教えることと習うことというのは本質的にはそう隔たりのあることではないと、事柄としては真実であろうが嫌味たらしい教訓を胸に、殊勝に職務を全うしようという決意もしはしていた。それに今回は結局のところ母国語の日本語で勝負できるし、第一ヨーロッパをうろついていた時のように宿の心配をする必要がないだけ安心だなどと相当屈折した思いで中国入りをした。

そういう妙に安心した部分と、屈折した、不本意な、それでいて晴れやかな、面映ゆい部分のいりまじった思いは、北京空港につい

たとたん増幅され帰国の日まで続くことになった。空港の長い廊下を抜け税関の処に来ると、内外を区切るガラスにへばりつくようにして我々の到着を待っている友人の顔が目にはいる。手を挙げて合図を送ろうとしているところへ「中川先生ですか」と中国側の人達と日本大使館の人がエスコートしてくれ、フリーパスで税関を出る。神戸三宮の中華料理屋天外天の大きな看板が見える。久しぶりに会う友人達が子供を抱きあげてくれたり、荷物を積み込んでくれる間に、大使館員が次々に中国側の人々を紹介する。まるで国賓並みだと自分のことを思う。空港から北京市内までの景色、行きかう中国の人達、一年の居処となる友誼賓館などなど景色の全てが想像通りで、自分の中で15年の間にかもし出されて来た中国が筋書き通りに眼の前に現われてくるだけという感じである。神戸に移って来た時感じたよそよそしささえない。そういうきわめてドメステックな部分が我々を安心させてくれる。一方、華やかな席と言えば結婚式か入学式くらいしか知らぬ我々に対して、教

育部(文部省にあたる)主催の歓迎の宴、表敬訪問、人民大会堂(国会議事堂)でのパーティーへの招待が続く。(人民大会堂での式典は当然のことながら政府の高官の挨拶がうち続き、その後専属楽団の音楽とともに食事が始まる、5才の娘は、挨拶の終るのが待ちきれず盗み喰いをする、2才の娘は、いつもそうであったが、挨拶の間は熟睡し、音楽がなるや目をさまし、もう然とごちそうにかぶりついていた。)日本大使館も天皇誕生日、鈴木総理訪中に際しての行事には出席するように言ってくる、自分が民ではなく官であるという日本ではほとんど関与的でない事柄が突如重みを持つ。勿論、学生時代以来一方的に敬愛していた学者が我が部屋をたずねて来てくれるなど余得も少なくはなかったが、世に言う出世というものがもたらす実態の一部を、こういう特殊な状況で垣間見た限りでは、故郷の父母を喜ばす以外には大して意味のない時間の浪費にすぎなかった。少なくとも私には車つきの生活より、バス代を節約して歩いたり走ったりする方が性にも身体にも合っているようだ。

それなら、お前は中国に一年いてさ程のことではなかったのかと問われるだろう。そんなことはない。シルクロードの旅、内モンゴル、成昆鉄道(成都・昆明間の山岳鉄道)、北京の街角、今思い出しても胸がキュンとなる。なによりも先にドメステックだ、筋書き通りだと言った部分に、自分ではそれ程異和感もなくなじんでいたと思ってはいたが、日本に帰ってから日本の様式にもどるのに半年以上もかかったということが、逆に、中国での一年間が日本のそれとはどれ程隔たったものであったかを物語っていると思う。(決して、お付の車がなくなったからではない。)だい

たい、訪中報告なるもの、これで3回目になると思うが、いつも、氷山を眼前にしてどの部分をオンザロックの氷にカチ割ってやろうかと思案しているような気分になる。そして結局、なに程のことも伝えられない。中国に限ったことではないが、どうぞ自分で行ってみて下さいというのが一番正直な報告であろう。(冬のロンドンでは午後3時には日が落ちはじめること、秋のセーナ河畔のすえたようなにおい、アフガニスタンの都市は国中がジンギスカン料理のにおいがしたと、それは甲子園球場の外野席がイカ焼きのにおいで充満しているのと同じようなことなのだが、気がきいた報告に聞えるのは、それが外国のことと言うに過ぎない。野球に興味のある方なら解ってもらえるだろうが、かの球場を本拠地にするチームが例の如くあるのをあのイカ焼のにおいの中で見る気持、逆に言えば、あの気持を抜きにして甲子園球場の外野席はイカ焼のにおいがすると報告してどれ程のことがあろう。)

実はこの小文では、竹脇無我、進藤恵美出演のテレビドラマ「姿三四郎」が中国でインテリも含めて大変なブームをまき起したことにまつわるエピソード、たとえば、私が姿三四郎の本すら読んでいない人間であることが判って、シェークスピアのことを知らない英国人を見るような眼付きで見られたことなどを紹介し、弘法大師が「あまり一流でない」ある中国の詩人の詩集を珍重していることと合せて外国文化の受容に関する私見を開陳するつもりであったが、スペースの関係と、イカ焼のにおいの連想から、憎きチームの尻のデカイ投手やら、ほったの脹らんだ三塁手のことが頭を占領し、筆足が乱れだして来た。これ以上支離滅裂になるのがコワイので。

(1984年1月27日) (追: それにしても、なぜかのチームの三塁手は、顔にボールをぶつけられそうになって転倒しても、ニヤニヤして起きあがるのだらう。それを、また四番打

者としての風格が出て来たなどと事実を歪曲する解説者を雇用するテレビ局があり、その放送を喰い入るように見る人々がいるのでしょか。) (中国語)

ワールドカップサッカー・スペイン大会 とフラメンコ・闘牛

五 島 祐 治 郎

みなさんは、NHKテレビで放映されたスペインワールドカップサッカー総集編“146ゴールのすべて”をみられたでしょうか。

ワールドカップサッカーとは、国際サッカー連盟加盟の国が国単位の代表チームを出して争うもので、4年に1度会場を移して行ない、オリンピックとオリンピックの中間に決勝大会をもつ。予選は2年がかりでくりひろげられ決勝大会の前年の暮には全チームが出そろふ。開催国と前回優勝国は自動的に出場権が与えられる。

第12回スペイン大会は、世界の加盟国150ヶ国のうち109ヶ国がエントリーし、予選を勝ち抜いた24ヶ国がマドリード、バルセロナを中心としてスペイン全土にわたる14都市、17会場にて857年6月13日の1次リーグを皮切りに、2次リーグを経て決勝戦の7月11日までの約1ヶ月間熱いたたかいをくりひろげ、44年ぶりにイタリアが優勝し、終わった。私は、そのうちの2次リーグから決勝戦までの約20日間をスペインの第2の都市バルセロナと首都マドリードで試合観戦したり、各国コーチとの会議などに出席したりして過ごした。では現地での観戦状況やスタンド風景などについて少しのべてみよう。

6月下旬のスペインは非常に暑いためホテルは市内をさげバルセロナから40kmほど離れた地中海沿岸のリゾート地、シッチェスという町にした。全日本チームも一緒であり、サッカーの話題には事欠かず、その上、海に面していたせいかレクリエーションにも多様性もて比較的すごしやすく、フランス、イタリアなどから国境を越えて訪れる観光客や海水浴客などでにぎわいもしたが意外と快適に過ごせた。しかし、試合の観戦ともなると意外や意外、サッカースタジアムでは観衆の熱気もあり殆んど毎日33度前後を記録するありさまであり閉口した。それでも試合に恵まれ、内容がスピードとスリルに富みすばらしく時間が経つのを忘れるほどだったので随分とすくわれた。それもそのはず2次リーグ進出国は、ヨーロッパ10、南米2であり、アジア・オセアニア地区代表は1次リーグで姿を消していた。

〔試合〕では2次リーグの試合の中より、世界のサッカーマンが最も注目していた、ブラジル対イタリアの試合をレポートしてみよう。7月5日、キックオフ17:15、バルセロナ(サリアグラウンド)、34度、イタリア

3-2 ブラジル、主審クライン(イスラエル)、47才、体育行政管理官、話せる言葉(英語、フランス語、スペイン語)。

感想: 熱狂的な応援合戦の中、華麗かつ緊迫した欧州対南米の名勝負。これがワールドクラスのプレーだ!と酔うような激しさ、速さ、巧みさを備えたサッカーであり、チームワーク、ゲームへの集中力、精神力には、ただただ感嘆、イタリアチームの局面打開の巧みさ、ブラジルプレーヤーのボールなしの創造的行為、サッカーは一人では勝てない、どれをとっても戦いのあとに歓喜をねがう世界一をかけた男達の瞬間の姿がうかがえる。ここまで新たなサッカーを創造し、チームをつくりあげ完成させた監督、コーチに敬服。やはりワールドカップサッカーの決勝大会は、サッカーの生きたお手本として計り知れない影響力もっている。スタンド風景: 入場券のランクはA、B、C、D、Eの5ランク。切符に記入されているスタジアムの入口、座席等はすべてスペイン語、フランス語、英語、ドイツ語で書かれている。勿論、試合のアナウンスも4ヶ国語でおこなわれる。観衆は、毎試合4万~10万、お祭りさわぎで熱狂し試合中でも関係なしに花火は打ちあげ、発煙筒をグラウンドへ投げ入れ狂気沙汰である。日本ではとても考えられない光景である。

では次に、サッカーからはなれてスペイン観光の2大ハイライトといわれているフラメンコ、闘牛について御紹介しよう。

〔フラメンコ〕フラメンコは、15世紀頃にスペイン南部のアンダルシア地方に移ってきたヒターノ(ジプシー)達が持っていた音楽と土着の民謡とが結びつき、さらに、これら

人々の人間性などが相まって誕生したといわれている。フラメンコは音楽的才能に恵まれたヒターノ達におうところが大きく今日のフラメンコ芸術を創りあげた根幹をなしていると評価されている。フラメンコ芸術が完成したのは19世紀から20世紀の初頭だとされている。その内容であるが、歌はドスのきいた太い声でジプシーの生活にもとづく苦しさ悲しさをうたったのがはじめといわれ、踊りは、フラメンコのサパタ(半長靴)をはき、カスタネットのひびきなどでフラメンコのムードをつくり出しスペイン独特の色彩の民族衣装をまとった女性と黒づくめの服の男性が掛け声をかけあい、けたたましい靴音(サパテアード)をひびかせ、はげしい身振り動き、突然のストップ、はでにポーズをとる独特の型で踊るものであり、おおよそ日本舞踊とは対照的な踊りである。勿論時には酒場の雰囲気よろしく陽気に踊り、歌いふるまいもする。ショーの前半はベテランの踊り子が中心であり、5幕ぐらい踊る。後半はうって変ってプロポーションもすばらしい一流のバレリーナのような踊り子が踊る。そのすばらしい踊りのあとには芸術的余韻が……。実際にマドリードの下町のタブラオ(レストラン・シアター風の酒場……食事つき、飲み物つきの勘定になっている)と呼ばれる店に行ってみた。料金は2000~3500ペセタ(約5,000~8,000円、1ペセタは約2.5円)ほどであり、時間は夜10時頃より深夜3時近くまでおこなわれている。

〔闘牛〕スペインの華ともいべき闘牛はフェイスタ・ナショナル(国民の祭典)とも呼ばれ、ヨーロッパの人達には見世ものとしてではなく荒々しい動物の突進力と危険に

直面した人間の優雅繊細な対応力のドラマ、たとえそれがつかの間ではあっても、そこにかもしだされる予期し得ぬ創作のドラマであると受けとめられ、この悲壮ともみられる対決に観衆は圧倒的な感動を与えられ、さらには、ある瞬間のすばらしい演技に出合った場合、新しい感動がわきあがるものと賞讃され現代も一般大衆の愛顧、熱狂的な支持を受けているといわれている。しかし、われわれのごとき少なからず儒教や仏教などによる東洋の倫理思想の影響を受けたものにとっては或る種の残酷性が感じられ、闘牛士のわざのすばらしさを満喫する余裕や雰囲気はなかなかもてそうもない。では闘牛の概略についてのべよう。闘牛場は、後楽園野球場を少し小さくしたほどのスタジアムであり、3~4万人収容できる。始まりは午後5時、夏は6時、時間は約2時間、6時といえまだ30度を越す暑さである。入場料は200~4,000ペセタ（約500~10,000円）である。日かげの席（ソンプラ）が一番高く、次いで日なたが日かげになる席（ソル・イン・ソンプラ）であり日なた席（ソル）が最も安い。また前の方の席が高く後席は安くなっている。1日の闘牛では3人のマタドール（とどめをさす人）と6頭の牛が闘う。牛は全て生後1年目にその闘争本能をテストし、それに合格した特別に獍猛な牛であり3才になると登場する。1頭の牛が闘い、とどめをさされるまでに要する時間は約20分。場面は3段階に展開される。第1段階はまずマタドールが牛に立ち向い、カパ（ケーブのこと。表がピンク、裏が黄色

の布。カパはカップ（マント）であって両手を使ってふりまわす。）をひろげて牛をさそい突撃する牛をやりすごすこと数回、牛の元気さと自分の腕前的一端をひけらかしてみせる。そのあと、そこへ馬に乗ったピカドール（ヤリで牛を傷つける人）が出てきて牛の首すじをさして牛を刺激興奮させると同時に牛を疲れさせ首を下がり気味にする。第2段階はパンデリリエーロ（モリ打ちをする人）がモリを2本両手にもって走って行ってパサドブレの音楽の中で牛の背にモリを打ちこむ、この時間帯は短いが手に汗にぎる緊迫感がある。いよいよ最後の第3段階。ふたたびマタドールが登場、ムレタ（真赤な布。ムレタはハート型で右手に剣をもつため左手だけで操作できるように棒がぬいこんである）を使って牛をやりすごす。ムレタで牛をやりすごすときもマタドールは勇気とテクニックを誇示しなければならない。手を自分の体すれすれに通過させたり、ひざをついてムレタをさばいたり、後向きになってみせたり、牛の頭の上にひじをついてみせたりする。しかしマタドールのこのようなキザな仕ぐさにも死の危険が裏にひそんでおり真剣にならざるを得ない。そしてこのような仕ぐさをくりかえしながら適当な頃合いをみて牛にとどめを刺し、闘牛は終るのである。すばらしい演技をみせたマタドールには惜しめない拍手と喝采があり、なりやまないのである。紙吹雪が舞い、テープが投げ入れられ、座ぶとんがとぶ……。いづこの国でも同じような光景がみられる。（保健体育）

ハイデルベルク訪問

角田 譲

4年毎に開かれる科学基礎論国際会議が、1983年にオーストリアのザルツブルクで開かれる知らせがきて、日本でも幾人かの人がこの会議に参加しようということになった。結局最終的には、今や数学者としてだけでなく、文筆家としても名高い九州大学の倉田令二郎氏、躁躁病の九州大学の上江州忠弘氏、名古屋大学の柘植利之氏、早稲田大学の高橋真氏、東京大学の大学院の学生の塚田春雄氏、及び私の6名が参加することになった。倉田、上江州の両氏と私は、ザルツブルクへ行くだけでは物足りないので、毎年ヨーロッパで開かれる記号論理学会にも出席しようということになって、その年に学会が開かれるアーヘンにも、そしてまた、親日家のハイデルベルク大学のミュラー氏を訪問するためにハイデルベルクにも行こうということになって結局3週間の長期旅行になってしまった。私はその2年程前にハイデルベルクを訪問したことが一度あるのですが、非常に美しい町なのでもう一度訪れてみたかったので異存のないところです。さて、面倒な手続を済まして成田を後にしたのが、7月4日、KLMで一路、フランクフルトへと飛びたったのであります。今回の旅行は、費用が文部省から出たので始めてまともな運賃で飛行機にのれるので（今までは、値引き運賃の飛行機ばかりで、ギューギュー詰めの空の旅にはうんざりしていた）さぞかし、快適な旅ができると思っていたが、そうは、ならないのが常で、やはり、常の如くハプニングがあった。御存知の様に、正規の運賃では、機内においてはアルコールが飲

み放題である。いやしくも、正規運賃で飛行機に乗る人の中でアルコールが^{ロハ}だから沢山飲んでやれという様なさもない御仁はいないだろうということだろうが悲しいかなここにいたのである。ボルドー・ワインがおいしいからと調子に乗ってやっていたところ、アンカレッジに飛行機が給油のために着いたときには完全にダウン、そして、その後は気分が悪くなって^{さんざん}な目にあったのであります。悲しいかな貧乏根性！フランクフルトへ着くとミュラー夫人が、大学が差し向けたミニバスで我々を出迎えて下さっていたので、ハイデルベルクまでのドライブとなりました。ドイツの田園風景は意外と日本のそれに似ているので、それ程、外国に来ているという感じがありません。しかし、ハイデルベルクへ車が入ってあの有名な古城が見えますと、まさに、我々はドイツにいるのだという実感がしてきます。ハイデルベルク大学はドイツでも有数の古い大学で日本では小説“アルト・ハイデルベルク”で有名です。ハイデルベルクでは我々はペンション・アストリアに逗留したのですが、ここは、私が前の訪問の時にも使用したペンションです。ハイデルベルク大学を訪れる数学者は大抵ここに陣取るという事らしいです。そもそも、我々がハイデルベルクを訪れた理由は各々が1時間程の講演をするため、観光旅行などではありませんぞ！さて、講演の日に大学に行くと、そこで、ミュラーさんより、世界的に有名な集合論研究者のヘプライ大学のレヴィ氏を紹介されました。これは私にとっては青天の

へきれきで、というのは私の講演は集合論の反射原理についてでありまして、この分野ではレヴィ氏は非常に卓越した仕事を多数されておられ、講演でへたな事は云えないという思いです。私の講演中、レヴィ氏の鋭い眼が背中に張りついているようで緊張の連続でありました。レヴィ氏が折角私の話を聞いてくれているので、少しサーヴィス精神を出して、話す予定でなかったレヴィ氏の結果についても言及するという生意気なアドリブをはさんだため、私の頭脳の記憶機構が混乱をきたし、折角憶えてきた英語が、無茶苦茶になりそれ

から自分でも何を云っているのか良く判らない程上ってしまったのでありました。それでも、3人とも何とか無事に講演を済ましてやれやれといったところでした。そして、その夜、年に2回開かれるという古城の花火祭りを見て、色々面白い事が起ったハイデルベルクをその週の土曜日に後にしたのであります。その後の、ザルツブルク、アーヘンも想像の通り珍道中でありましたが、紙数の都合上、及び、余り詳細に書いてあの連中何をしとったのか?と云われないためにもこの所で筆を置くのが無難なようで。(数学)

マドラス——ニルギリ——コーチン ——南インドの旅から

野村 亮太郎

昨年の夏、私は南インドを東岸のマドラスから西岸のコーチンまで、ほぼ南西に向って横断した。その距離は直線でおよそ600km、広大なインド亜大陸からみれば、ほんの一部を横切ったのにすぎないが、その途次、目についたこともいくつかあったので、南インドの側面として紹介しておこうと思う。勿論、この時期のインドはモンスーンの最中である。

一般にインドは南方にあって暑い国であると思われている(らしい)。事実、酷暑の季節(3~5月)には連日35°をこえ、特に大陸内部では40°、砂漠周辺では50°に達することもある。だが、時には寒波が襲来し、凍死者が出るのもインドである。極端な例を引くまでもなく、南部の熱帯から北部カラコラムの氷河をとまなう気候まで、インドの気候には変化がある。しかし、南インドといえば熱帯の地域であり、ほぼ一様に暑いところとみられよう。では、南インドの気候はどのようなものなのか、ここに訪れたマドラス、コーチンのほか内陸のバンガロール、コイナ

トル、それに比較の意味で神戸の気候のデータを示そう。こうしてみると、これらの都市の8月の気温は神戸のそれにくらべて著しく高くはないということがわかる。たしかに暑いのは事実だが、がまんのできないものではなかった。ふだんから、日本の夏で蒸し暑さに慣れているから、それほど苦にならなかったのかも知れない。

熱帯では、1年間の温度変化の量よりも1日の変化量の方が大である。したがって、月平均気温だけを眺めていても実態がとらえられたことにはならない。そこで代表的地点の7月28日の最高・最低気温・雨量、モンスーン季にはいつからの累計雨量を示しておく。

表2 1983年7月28日の気温と雨

	最高 気温℃	最低 気温℃	雨量 mm	6月1日以降の 累積雨量mm
マドラス	34	25	9	145
バンガロール	29	21	3	283
コイナートル	33	22	0	66
オータカマンド	20	9	0	224
マイソール	28	20	0	220
コーチン	31	25	0	895

(THE HINDU、1983.7.28による)

表1 南インド主要地点の気候表

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年平均
マドラス	24.5 24	25.8 7	27.9 15	30.5 25	32.7 52	32.5 53	30.7 83	30.1 124	29.7 118	28.1 267	25.9 308	24.6 157	28.6 1233
バンガ ロール	20.9 3	23.1 10	25.7 6	27.3 46	26.9 117	24.3 80	23.2 117	23.3 147	23.3 143	23.3 185	21.7 54	20.5 16	23.6 924
コイ ナートル	24.1 18	25.9 8	28.2 12	29.4 43	28.9 64	26.8 36	26.0 47	26.2 33	26.6 42	26.2 162	25.1 113	23.9 38	26.4 614
コーチン	26.9 10	27.5 34	28.5 50	28.7 145	28.3 364	26.5 756	25.9 572	26.1 386	26.3 235	26.7 333	27.0 184	26.9 37	27.1 3106
(神戸)	4.5 41	4.8 56	7.7 94	13.2 123	18.0 123	21.7 182	26.0 184	27.1 136	23.5 175	17.6 105	12.5 76	7.4 44	15.3 1337

上段は月平均気温℃、下段は月平均降水量mm、神戸は「理科年表」、それ以外は「アジアの気候」による



昨夏の日本とどちらが暑いであろうか。

南インドの大部分を占める西ゴーツ山脈の東斜面は、西斜面にくらべて雨季の降雨日数も少なく、雨量も少ない。マドラスのばあい、雨季はこの時期ではなくて10月以降の南西モンスーンの後退期にあらわれている。このため、マドラスでは曇天がつづいたのみであった。マイソールなど、山脈の背後の内陸では、雲も余りなく、早朝の気温の低下のためにわずかに霧がみられる程度で、「雨季のインド」というイメージとはかなりちがう。



マドラスの市街（曇）。
南インド最大の都市、緑が非常に多い。

ところで、西ゴーツ山脈の南部にニルギリ丘陵と呼ばれる山地がある。英語では Nilgiri Hills となっているが、丘陵というより、山地、もしくは高原と呼ぶべき山容である。丘陵部の最高峰は Doda Betta 山で2637mの高度がある。このほか、2500mをこえる山地もいくつかあって、1800mよりも高いところは草原が目立つ森林地帯となっている。8月はこの山地も勿論雨季で、山並は雲にさまたげられて十分みることができなかったが、草原の緑、茶畑の緑は絵に描いた様に美しい。ニルギリを通過したのは真昼の一番暖かい時間であるが、肌寒く感じられた。若し早朝には10°以下になるのだから、そのころにでも通過していれば、大変な目にあっ

ただろう。イギリス人はこの土地を避暑地として開発し、オータカムンド(2,200m)の町を、また山腹には茶園を発達させたのである。



マイソール高原（晴）。谷筋には耕地と民家がある。手前の草地では羊の放牧が行なわれる。（高原面より200 m程高い島状）（丘陵では早朝に霧）

ニルギリ丘陵の南側には、ほぼ北東—南西方向にはしる断層によってつくられた、1000 m以上の高度差のある急崖がつづいている。この断層崖下には広大な扇状地があって、これをすぎるとパルガット回廊にいたる。このパルガット回廊は西ゴーツ山脈で最大の低地帯で、ベンガル湾側の斜面がここまでのびて来て、アラビア海側と斜面と接する。一種の谷中分水界となっている。また、アラビア海からインドに吹きこむ南西モンスーンは、ここが周囲よりもはるかに低いため、回廊部を吹き抜けてタミールナドゥ平原の内陸に雨をもたらすといわれ、モンスーンに頼るタミールの農業にとっては大切なところである。この西側は熱帯モンスーン気候の、おりから雨季まっただ中のケララ州である。去年は7月下旬からモンスーンが弱まっていたこともあって、マドラスからパルガットまで雨らしい雨に合わずに来た。ケララでは雨季にはいつて以降（6月1日以降）の雨量は平年にくらべて20~50%少ないという。しかし、8月1日からモンスーンの活動が強まり、コーチンで

はものの1分もたたないうちに下着までびしょ濡れになるような、しゅう雨に出合うことになり、熱帯モンスーンの雨のものすごさを実感させられた。また、この雨こそ、インドの農業を支えるものであり、雨季にはいつてからの累積雨量と平年に対する比率がしきりに新聞報道されるのである。

ところで、しばしば、「インドは……」というように一括してしまいがちである。しかし、気候一つとってみても、インド南部ですら、これだけ異なるのである。地域毎に大差のあることは言語についても同様である。インドは、主に北部に分布するアーリア系と南部を占めるドラビダ系を中心とした多言語国家である。南インドはドラビダ系の世界であるから、「南インド……」と一括してもいいようであるが、実際には州毎に言語が異なり、



コーチンの海岸（雨）。漁船のかけに雨宿りする子供。船や漁具の形が面白い。

当然文字もちがう。現地人相互でも、州が異なれば、相手の話を理解できないようである。丁度、コロomboで民族問題に端を発して暴動が発生、多数のセイロン・タミールが襲撃を受けた。南インドでは、8月初め、セイロン・タミールを支援する行動がしきりに行なわれていた。丁度この時期にカルターナカ州からバスでニルギリを経てコーチンへ向ったのだが、その途中でしばしば支援行動にゆく手をはばまれた。バスを停車させ、その窓、側壁にスローガンをかき、貼り紙をする。文字はタミール語であり、カンナダ語を話すものには、その意味がわからないのである。隣接する州の、しかも、かなり頻繁に往来する交通関係者ですら理解できない。すべての人が英語を話せる訳でもないのに、時には意志の疎通がむずかしいこともある。そのためか、インド紙幣にはヒンズー語のほか、タミール語、カンナダ語といった13の主要な地方語がかかれており、その上、英語がかいてある。この最後の英語についてであるが、通貨は外国人も使用するものであるから、その面では当然のようである。しかし、この場合は必ずしも外国人のためにだけであるのではない。インドの国情の一端が知れるのではなからうか。

（地理）

滞米日記抄

横山雅彦

文部省から本学に割り当てられたサバティカルの恩恵に浴して、一昨年の秋から昨年の夏まで、米英両国で研究生活を送ることができた。だが帰国後ルーティン・ワークに追われて忙しい毎日を過しているうちに、海外滞在中の体験がいつの間にか記憶の前景からすっかり退いてしまっていた。時には知友の名前すら失念し、考えこんでしまうほどの重度健忘症に悩まされている僕にとって、これは不思議でもなんでもない日常茶飯事だが、広報委員会からの寄稿の注文に応じるには甚だもって都合が悪い。かといって今回はどうも断わるわけにはいかない。それで窮余の一策として、滞米中の日記にいくらか粉飾を施したものを以下に抜萃して、お茶を濁すことにした。日記の性格上まとまりを欠いているが、これは御容赦いただこう。

×月×日 大阪から、成田、サンフランシスコ、シカゴを経て、最終目的地のブルーミントン（インディアナ州）へと20時間以上にわたって乗り継いできた空の旅は、シカゴで一寸まどついたのを除けば、すべて順調であった。ブルーミントン空港に到着したのは、夜10時頃だったが、僕がこれから過すことになるインディアナ大学（IU）のE. グラント教授が出迎えに来てくれたのは有難かった。教授は中世科学史の専門家で、特に14世紀パリ学派の緻密な研究でよく知られている。夜は大学近くのホテルに宿泊したが、ホテルのラウンジでは学生のパーティが開かれていて、僕も飛び込みで参加した。ゴーゴー・ダンス

を眺めながらビールを飲んでいると、1人の黒人学生が微笑を浮かべながら、日本語で「コンバンワ」と話しかけてきた。どこでその言葉を知ったのかと尋ねると、東京暮しの経験のある彼の兄から教わったという返事が返ってきた。彼のこの陽気な挨拶は外国での第1日目ということでもかなり緊張していた僕の気持ちをすっかり解きほぐしてくれた。明日からは、大学の妻帯者用の寮で10数年振りの独身生活が始まることになる。快適しないアメリカに持ち越した胃病が悪化しないのを祈るのみ。

×月×日 自炊の夕食を摂りながら、テレビのニュースを見ていると、キャスターとまだ若い黒人学者の短い対談が映された。キャスターの紹介によると、この学者はシカゴ大学で教授に抜擢された最初の黒人だという。そういわれて思い起こしてみると、IUで僕はまだ黒人教師にお目に掛ったことがないのに気づいた。いや教師だけではなく、事務職員の中にもほとんど見かけたことがない。黒人学生はかなりの数に昇り、また構内には黒人文化センターの建物があるほどなのに、これはたしかに異様な現象である。黒人に対する実質的な差別が大学という特殊な組織の中に典型的な形で反映しているとしか考えられない。

×月×日 米国の大学図書館については前から或る程度の予備知識を仕入れて知っていたが、実際に利用してみるとその有難味がよくわかる。IUの図書館は約200万冊の蔵書——これは全米の大学図書館中屈指とのこと

——を誇る本館と、稀覯書その他の特殊な専門文献を集めたいくつかの分館とから成立している。分館の運営システムはそれぞれすこしづつ異っているが、本館は朝8時15分から夜12時まで開かれていて、日曜日や祭日も、感謝祭、クリスマス、新年の日を除けば、休館にはならない。しかも館内はすべて開架式になっていて立入り自由なので、いろいろの書物を直接自分の眼でチェックして必要な文献を検索することができる。そのうえ11階建てのこの建物の各階にコイン式の複写機が配備されているので、利用者にとって極めて便利である。一般学生は2週間の期限——これを破るとかなりの罰金が課される——で無制限に本を借り出すことができるが、僕は正規の教員と同種の借覧証を交付されたおかげで、借出期間が1年となっており、違反金を払う心配をする必要がない。だが借出期間が2週間を越えた時点で他に借出の希望者がおれば速やかに返却しなければならない仕組みになっている。また大学間の相互貸借制度も整備されているので、他の大学図書館の蔵書もそれほど困難を伴わずに読むことができる。先日、科学史の大学院生に神大の図書館の実情について話したところ、彼はまったく信じられないといった表情を浮かべ、「一体学生はどうやって図書館で勉強するんかい」と問い返してきた。たしかに誰が見ても、米国の大学図書館と日本のそれとの間にはまさに雲泥の差が存するといえよう。もっともこれだけ大規模な図書館の整理運用をスムーズに行なうには多数の担当者を必要とするが、その大部分は学生アルバイトや司書の資格のない非専門家で賄って経費節減に努めているようだ。

夜行性の僕はいつも暗くなってから図書館にでかけるのが常であるが、今夜はその図書館で

貴重な体験をすることができた。本館地階にあるマイクロフィルム資料室に行って複写を申し込むと、憂鬱そうな表情の近東系の中年の係員が応待に出てきた。会話は下手だが宜しくと言って、用事を頼むと、彼は「私はイランから来たが、お前はどこの国から来たのか」と尋ねた。その質問に簡単に答えた後、イランという彼の言葉に関心を唆られた僕は今度は逆に彼にいくつかの質問を発した。その返答によれば、彼はイランの大学で教育方法論を教えていたが、あのホメイニ革命が急進化する中で知識人に対する迫害が激しくなったために、1年ほど前に家族ともども米国に亡命してきたという。他に数千人のイラン人が祖国から脱出したが、その大部分は単身で、家族を同伴できたのは幸運な方であったとも付け加えた。バニサドル大統領のイラン脱出については日本の新聞紙上でも詳しく報道されたが、それとほぼ前後して大量のインテリが亡命したという事実にはまったく考え及ばなかった僕自身の想像力の貧困さが情けなくさえ思われた。彼の話に耳を傾けながら、僕はロシア革命や中国の文化革命のことを思い浮べずにはおれなかった。おそらくその名に値いするいかなる革命においてであれ、インテリが白眼視され、迫害されるのは不可避免的な運命であろうということを bookish な知識としては理解していても、直接その犠牲者となった人物とこうして出会い、話を交わす機会を持つてみると、さまざまな感慨が胸裡にこみあげてくるのを禁ずることはできなかった。仕上がったコピーを受け取りながら、「老齢のホメイニが間もなく亡くなれば、事態は改善されるのではないだろうか」と、僕としては精一杯の慰めを述べたつもりだったが、彼はそれには黙してなにも答えなかった。

×月×日 IUの日本人会の総会が開かれるという案内記事を近くの掲示板で見かけたので、参加した。約40人近くの日本人が家族を引き連れて集まっていた。僕は米国に来てこの時初めて日本語を口にした。出席者全員の自己紹介があったが、それによるとほとんどが大学院生で、中にごく少数教員や事務員として働いている人達が混っていることがわかった。専売公社から派遣されてきたという隣席の学生から、IUに在籍している日本学生の総数は軽く100人を突破しているということを知り驚いた。

ここで一言付言しておきたいことがある。それは大学の構内などを歩いていて時々出会う「日本人らしいアジア人」の妙なよそよそしさである。視線が会うと、10人中8～9人がさっと眼を逸らしてしまう。初めのうちは、僕が相手に不快な印象でも与えたかのような後味の悪い気分が襲われたが、同じような経験を幾度か繰返すにつれて、どうもそうではないことが次第に判明してきた。しかも日本人でないことが歴然たるアジア人からはこのような苦い経験を味わったことはまだ一度もない。どうやらこれは日本人独自の態度らしい。先刻の自己紹介の際、「皆さん、今後お互いに出会った時などには、日本語で今日ぐらいの挨拶をしようではありませんか」と呼びかけていた当の人物にしてから、先日路上で擦れ違った時にはそっぽを向いたのだから幾分恐れいってしまった。僕自身のことも含めて、海外留学中の日本人の態度について、いつかじっくり分析の対象にしてみるだけの価値はどうやらありそうだ。

×月×日 先週は寒い日ばかりが続いたが、今週はまだ例の crazy な馬鹿暖かい天気に戻った。今は9日間の spring break で、大

半の学生は学生自治会主宰のフロリダへの団体旅行を楽しんでいるか、郷里に帰っているようだ。僕の寮で見かけるのもほとんど非アメリカ人だけだ。そのためキャンパスはすっかり静まりかえり、普段なら真夜中すぎまで騒いでいる学生達の嬌声も聞えず、こちらにとっては有難き幸せである。科学史の教師が「なんといっても学生のいない大学が最高だね」と言って、いたづらっぽく笑ったのが思い出される。大学当局はだがこの最高であるはずの状況において大きな心配事を抱えている。それは、新年になってキャンパスでは事もあろうにハシカが猖獗をきわめ、近年では記録破りの200人近くの患者が発生したからである。州の保健局ではこの伝染病が他の都市にまで蔓延するのを恐れて、大学当局に春休みを取消すか延期するよう要請した。無論この要請は一蹴された。病気発生後予防注射を受けた学生数はほぼ1.5万人ということだが、IUの登録学生総数は3万人をすこし越えるから、まだ過半数の学生は受けていないことになる。そのうちまだ免疫になっていない学生がどの程度罹病して、病菌をフロリダその他に撒き散らして帰ってくるか、大学当局にとっては頭痛の種なわけだ。事と次第によっては大学の保健管理担当者の首がいくつか飛ぶ可能性もあるようだ。既に州の保健局は事後対策に関して大学側に大きな落度があったために、集団発病にいたったのだと舌鋒鋭く批判を行ない始めている。

×月×日 昨日投票されたシカゴの選挙で、黒人民主党候補のワシントンが次期市長に選出された。予備選挙で現職の女性市長を破って民主党の候補となった彼は、伝統的に民主党が共和党よりもはるかに強力な政治的基盤を持つシカゴでは、当初、本選挙でも楽勝と

予想されていた。だがその後、黒人が市長になったら何をされるかわからないという不安が白人中産階級の間次第に拡がり、最後には一種のパニック状態にまでなったようだ。そのため白人の民主党活動家の中にも、単なる当て馬にすぎなかったユダヤ人共和党候補エプトン——数ヶ月前シカゴでレーガン大統領主宰の大規模なパーティが開かれた時、彼は招待すらされなかった！——に寝返りするものが続出した。ユダヤ人と黒人の間で争われた本選挙は近年稀れに見る泥試合だったといわれる。じっさい、テレビのニュースで見た限りでも、日本ではほとんど想像できないようなえげつなさであった。結局ワシントンは僅差でエプトンに勝ったが、アメリカ第二の大都市でのこの選挙戦は、これまで選挙人名簿への登録すらほとんどしなかった黒人が団結して立ちあがった時の威力をまざまざと

示してくれた。この大成功に気を良くして、次期大統領候補として黒人を押す気運がかなり盛りあがってきているが、現実には黒人が民主党候補として、あるいは第三の政党の候補として名乗りあげれば、アメリカの政治もいくらか変貌するのではないかと思う。

×月×日 春休み以降、懸念されていた事態は何も起こらず、ハシカは急速に終熄へと向かった。御同慶の至りである。しかし対策費として支出された金は相当の額に昇るらしく、州当局と大学当局の間ではどのように清算するかですこしく揉めているようだ。保健制度上の不備のため現在大学適齢期のアメリカの若者は予防注射を受けずに成長したために生じた疾病流行と分析されているが、高く付いた授業料だったことになる。

(自然科学史)

不思議な国アメリカ

水口志乃扶

昨年の夏、2ヶ月程UCLAに行ってきた。事務手続き上は、「研修」と言うのだそうだが、何のことはない、アメリカ言語学会主催のセミナーに出席するのが目的であった。UCLAという文字は、トレーナーやバッグなどのキャラクター商品で、日本でもすっかりお馴染みになっているが、University of California, Los Angeles (カリフォルニア大学ロサンゼルス校)の略称である。カリフォルニア大学は、カリフォルニア州のあちこちに10いくつあるが、UCLAもその一つである。短い滞在期間で、新しい言語理論

を習得するのは不可能であるが、UCLAでのゼミナールでは、方法論を学ぶことができたし、自分をいつもとは違った角度から眺めることができたように思う。それもアメリカという不思議な国で。

アメリカという国は、どんな言葉が聞こえてきても、不思議ではない所である。アメリカ人＝英語を話す人、という図式は成立しない。まずもって、空港に降り立った時から、アングロサクソン系の顔よりも、アジア系の顔が多いのに驚いた。ロサンゼルスに着いた

はずなのに、アジアのどこかの国に迷い込んだような気がした。これが第一印象。それに日本車の多いこと。走っている車の3分の1くらいは日本車、それも日産やホンダの車が多いように感じた。まあ、カリフォルニアはアメリカではない、と言われているから、少し値引いて考えるにしても、アメリカさんが貿易摩擦で怒るのも、無理はないと思った。

アメリカ人について。とにかくタフ、エネルギーのかたまり。セミナーの様子を少し紹介すれば、このことが分かっていたかと思う。

授業：朝8時から、夜9時まで。もちろん好きなコースを好きなだけ採ればよいのだが、前の晩、どんなに遅くまでパーティーをしよう、と、定刻にはきっちり現れる。神戸大の学生とは大違いである。教える方も時間より早目に来て、学生を待っているし、その授業たるや、2時間、しゃべりまくり、書きまくり、学生の質問にもよく答えてくれる。アメリカのプロフェッサーは、教える時間も結構長いし、学生との議論にもずい分とつき合ってくれる。論文を書くのにも忙しいはずなのに、週末はしっかりと遊び、人生を十分に楽しんでいるように見えた。ジョークもおもしろいし、「レーガンはバカだ」という例文も飛び出し、学生の心をつかむのがうまい。プロフェッサーとは、エンターティナーの別名かと思ったこともしばしばである。言語学よりも、あのライフスタイルの秘訣、ぜひとも伝授してほしかった。それにしてもびっくりしたのは、子連れで授業をしているプロフェッサーがいたこと。2組に1組が離婚するというアメリカでは、日常的な風景になるのだろうか。

キャンパス：広い。とにかく広い。寮からクラスまで歩いて片道20分。そこを1日2往復はしたので、それだけで真黒になってしまった。今年の夏のロサンゼルスオリンピックのための工事でバタバタしていたけれども、そ



ゴシック様式のカークホフ・ホール

れでも建物もなかなか趣があって、キャンパスの美しさは、日本の大学の比ではない。オーストラリアでよく見かけたユーカリやジャカランダが多いのも、私にはうれしい事だった。

一見平和なキャンパスのあちこちに核シェルターがあったのは、本当にショックだった。シェルターに逃げたところで、一人だけ生き残っても、惨状を見るだけで、仕方がないじゃないか、と言ったら、それは日本人の考え方なのだと、笑われてしまった。自分だけは最後まで生き残るつもりらしい。日本でも話題になった、The Day After という映画は、アメリカで大変な反響を呼んだそうだが、かつての広島、長崎の惨状は、映画の比ではないと聞く。核シェルターを作れば大丈夫と

いう考えがあまりにも幼稚に思われ、また、人間の知恵なんて、核シェルターをせっせと作る程度のものなのかと妙にさめた気分になってしまった。

寮生活：ほとんどのアメリカ人はパーティー



セミナー最後の、野外パーティ

好き。学生も例外ではない。週末は夜遅くまで騒ぎ、パーティーのきれいな者にはつらい時になる。それでもエネルギーが余るのか、火災報知器のいたずらをよくするのは閉口した。6週間に5回（2日連続のこともあった）、それも決まって夜中の2時か3時。一たん鳴り出すと30分は止まらず（その頃やっとな消防車来る）、またあの音たるや、生理的に部屋にいられるような音ではない。学生寮ではどこでもよくあるいたずらと聞く。きっとアメリカ人は狼男の話を知らないのだろう。

日本は確かに便利のよい国だけれど、私は外国にいる時の方が、精神的にはよほど良い。日本で殻に閉じこもっているわけではないけ

れど、外国にいるとのびのびして、精神が開いてゆくの分かる。私にも何かできるような気になってくるから不思議だ。特にアメリカは、個人として外国人を見てくれる気がする。かつて住んだオーストラリアでは、いつも国旗を背おわされているような気がしていたが、少なくともロスではそう感じたことは一度もなかった。

アメリカは、あまりにも多くの問題をかかえた国である。しかし、やはり魅力のある国でもある。何と云っても、多様性を認める寛大さをもっていることがすばらしい。カントリーが似合う所もあれば、ジャズがピッタリくる所もある。それに、グランドキャニオンのように、言葉が一切いらぬ所もあるというふうである。ニューヨークから来たという女の子の言葉が印象的だった。「私があなたを好きなのは、あなたが日本人だからではない。何人なんて関係ない。一人の人間として好きなだけだ。」無意識のうちに国籍で人を見ていた私は、我が身を恥じた。

アメリカで会ったおもしろい人たちのことについても書きたいが、すでに紙幅も尽きたので、またの機会に譲ることにしよう。それにしても、こんな事を書いていたら、またアメリカに行きたくなってきてしまった。この気持ち、どうしてくれよう。（英語）

被告になったネコゼ君

本通りから右折して入った角のスーパーの駐車場で、ふとバックミラーを見ると、パトカーの赤いランプが横にずらりと並んだ例のやつが、チカチカ、ギラギラ、点滅しながらグルグル回っている。ン……？ 何かやったかな？

「車検切れとるよ。」ぶっきら棒なニューハンプシャー弁で警官が言った。

「アノー、ナンノコトデスカ？」猫背の日本人が問い返した。

「フロントガラスの白いラベルだよ。切れとるだろ、ほら」と血色のいい太った男が、白い手袋をはめた手をラベルの外側に当てる。「こうしたら字が読めるだろ。な、去年の11月で車検切れだ。このまま走るのは違反だ。ちょっと免許を。今日は土曜日だ。来週早々どこかで検査を受けろ。いいな。」

「ヘー、あめりかデモシヤケンヤッテルノデスカ？」

「その通り。これは君の車だろ。さあ、これ渡しとく。」と言いながら、彼は猫背にピンクの紙片を手渡した。「じゃ、いい週末をね、バイバイ。」

そうか、警告で済んだんだ。ああよかった。アパートに戻ってよく見ると、新書版ほどの書類に「召喚状」と見出しがあり、違反事項「車検切れ」、違反場所、ダーラム市本通り〇〇番地、有罪と本人が認める際は、「有罪」とある見出しにチェックして本状をダーラム地方裁判所に送付せよ、無罪又はそうと判断が出来ぬ際は、その項目をチェックして送付し、1983年1月14日金曜日午前9時、裁判所

もり はるひで

に出頭せよ、とあるではないか。日時はあの警官が書き込んでいた。それなのに、何かいい週末をだ！

その日は空いているが、こりゃ困ったぞ。そうだ、裁判所で書記のアルバイトをしている日本人の留学生がいた、あの男に尋ねてみよう。何かいい知恵を授けてくれるに違いない。

「先生、事務所へそれ持ってすぐに行きなさいよ。多分、判事に手紙を書けとか何とか教えてくれますよ。」

彼が言った通り、事務官は判事に手紙を出して、車検のことは知らなかった、済まなかったと詫びを言えばいい。許してくれるだろう。有罪でも25ドル払えば済む。自分で判断出来ないとか、無罪を主張したいなら指定された日に出席してもいいし、手紙を出せばうまく行くかも知れないから、それが一番だ、と行き届いた指示を彼に与えた。

猫背の男はこれまでに度々スピード違反でつかまり、最低2、3万円は日本の警察に支払っていたが、年老いてからは心を入れかえ、今は「優良運転手」として表彰されていた。だから、もしもこのアメリカの片田舎で有罪となり、たかが25ドルの罪金だとしても、日本の優良運転手がそれを払われたとしたら、これはゆゆしき問題である。

一度被告になってみてもよからうという野次馬根性と、同時に自己防衛本能が頭をもたげたのである。

「裁判長閣下、私ハ同封ノ如キ召喚状ヲ手渡サレタモノデアリマスガ、有罪、無罪ソノ他

ノ判断ガツキカネルノデアリマス。私ハ昨年9月、日本ヨリ客員教授トシテ当地ニ参リマシテ以来、貴国ト貴州ノ法律ヲ遵守致シテオリマスガ、本件ノ車検制度ニ関シマシテハ全クソノ知識ヲ有シナカッタノデアリマス。全テノ判断ハ閣下ニ委ネ、ゴ指示ニ従ウ所存デアリマス。敬具」

彼は親しいアメリカ人の同僚にこれでもかと手紙を見せた。うん、これは結局何も主張しとらんが、恭順の意はよく出ておる。よし、俺が当日一緒に行つてやろう。オッチョコチョイさ加減において彼は猫背をはるかに凌ぐオッチョコチョイ。手紙は送らず、当日持参する取り決めと相成った。

「さて、ミスター・ネコゼ君、立ちなさい。君は有罪かね、無罪かね？」

そら来やがった。

「ハイ、閣下。私ハ英語ヲ母国語ト致シマセン。誤解ヲ生ジルコトヲ恐レ、手紙ヲ持参致シマシタ。ソレヲオ読ミ下サイ。」

「いや、君の英語は立派に通じておる。口頭で申し立てなさい。」2、3人が笑った。

ネコゼ氏は一瞬体を硬直させ、一層タドタドしいエイゴで、暗記してきた手紙の中味を棒読みした。

「本件でたとえ有罪となっても、それは犯罪を犯かしたのとは異なり、単なる規則違反に過ぎない。たとえ君が客員教授であり、知らずに本ニューハンプシャー州の交通法規に違反したとしても、違反は違反として罰せられなければならない。本官は、しかし、君の個人的事情を酌量し、君の違反事実を記録に留めるのみとし、罰金刑を免除する。」

「ホントニアリガトウゴザイマス、閣下」

「おい、うまくやったぜ。25ドルで今夜一杯やろうや。おい、まだ帰えるなよ。ほら、

他に沢山来てるだろ、ちょっと見学してこようや」というオッチョコ氏の提案で、ネコゼ氏も腰を落ちつけた。

「次に、ジョン・ウエイン、なぜ車検をしなかったか？」

「ど忘れしたんじゃよ！」大声で耳の遠い老人が叫んだ。

「人間80歳ともなれば、ものを忘れることもある。次には気をつけたまえ。本件を記録に留め、罰金を免除する。」

大体結果を察していたらしいこのじいさん、早々に退散していった。

「あ、ちょっとお待ち下さい、閣下。先程名前を呼ばれましたが、本人は今日高校の試験で来れず、父親の私が代理で出席致しております。事件をご処理願えますか？」中年の紳士が立ち上っていた。

「よろしい。事件の顛末は本状に詳述してある通りである。書記、読み上げなさい。結構。少年の飲酒は100ドルの罰金刑である。但し、父親が責任をもって、『少年の飲酒と社会秩序』という反省文を書かせ、何らかの奉仕活動を地域社会のためにさせよ。然らば罰金の中75ドルを免除し、本人に25ドルを支払わせるものとする。」

猫背先生はここでグット息をのみ、この大岡裁判に満腔の敬意を表した。

「次。君はなぜリズの家の上階まで雨どいを伝って登るところをつかまったのか？」

この町の大学生が立ち上った。「玄関が開ってたんだよ。」聴衆、いや満席の被告席からドッと大爆笑。

「静かに！」バンバンと木づちの音。「すると君はロミオの現代版だな。次からは恋人に先ず電話入れて、表玄関から入れ！」被告席からまた大爆笑。

「静かになさい！次……」

「おい、ガイジンの君のお蔭で滅多にないいい経験をさせてもらったよ。君も上首尾、

立派だったよ。だがあの判事さん、もの分かりがいいんで町の人気者なんだな。じゃ、今晚7時でいいか？例の所だな。」（英語）

20年ぶりのモスクワ

小野理子

昨年11月26日から12月7日まで、第6回ソビエト文学翻訳者国際会議に出席するため、19年半——ほとんど20年——ぶりに訪ソした。

会議はモスクワのソ連作家同盟本部のある会館のホールで、東西33ヶ国の翻訳者研究者と、40名ばかりのソ連側の作家評論家が参加してひらかれたあと、3日間が地方見学とその地の作家たちとの交流にあてられた。

討議の内容（発言は各国のロシア・ソビエト文学紹介の現状と問題点をはじめ、翻訳理論上の諸問題、はては新造俗語の氾濫への抗議？にいたる、なかなか多彩なものだったが）は、いずれあらためて整理の機会があると思うので、ここでは簡単に旅の印象を語ることをお許しいただきたい。

私が2年間のモスクワ大学大学院生活をおえて日本に帰ってきたのが19年半前の1964年夏、それに先だつ3年余の日本語科教師時代にさかのぼれば、ソ連に入るのはじつに4分の1世紀ぶりというわけで、正直いささか緊張気味で成田を飛発った。ただただ雪と氷のシベリア北部をとぶこと10時間、0度前後でさほど寒くはないモスクワ・シェレメーチェボ空港におりたつ。トランクを受取って入国手続きは首尾よくすんだが、作家同盟からの出迎えは、いない！（あとで判明したことに、

日本係の人は私が5日前に打った電報を受取っていなかった。どこへ紛れたやら）両替所でコペイカ玉を仕入れ、公衆電話にとりつき、待つこと30分、幸い泊るべきホテルが判明してタクシーに乗込んだ。

午後7時に近く、すっかり夜の雪景色の中を市内に入ると、昔は気づかなかった道幅のひろさに一驚。10年あまり前に出来たロシアホテルというののばかでかさにまた一驚。それでも各階の当直のおねえさん・おばさん（ここは西側のホテルならフロントにあたる所で、キィの保管もすればお茶もくれる）の率直な親切さかげんは、昔通りで一安心。

次の朝、出迎えなかった詫びの言葉とともに作家同盟日本担当の女性があらわれ、会議のプログラムその他をくれて「今日明日の行事は見学が主だから、モスクワをよく知っているあなたは、別の希望があればどうぞー」。渡りに船、レーニン図書館に行きたいのだが……と言うと、てきぱきと書類をととのえて手続きをしてくれた。

レーニン記念ソ連邦国立図書館。ヨーロッパ最大といわれ、1、170万冊の蔵書と雑誌1、000万をほこるここは、完全に昔のままだった。研究者用閲覧室の、古色蒼然たる電球灯が2個ずつついた大机、懇切で博識な年輩の女性コンサルタント、ホテル並みの薄着で2

時間もすわっていると胴ぶるいの来るような低温暖房。日本にはない18世紀の本や、19世紀の雑誌をしてみたま借り出して、私はこのあと1週間、会議のあと、芝居に行かない夜はいつもここに来て、10時の閉館まぎわまで、ときたま心の中で「日本の皆さん、お忙しいのに私だけ、すみません。あんさんお元気ですか、悪うおすなァ」と唱えつつ、幸せな時間をすごした。

さて会議は正式に11月28日に始まり、日本からは、ひと足おそく着かれた日本福祉大の草鹿教授、早稲田大の宮沢講師、そして私の3名が、出席した。中国からもはじめて参加があって、盛んにカメラが向けられていた。

ホールの中央でふと大柄なロシア女性と顔があった。「インナ！」「ミチコ！」とささやかに両方から相手の名前が発せられて、私たちは抱きあっていた。院生時代の旧友で、彼女の評論を私は新聞雑誌で読んではいるが、文通はしていなかった人である。

「すぐわかったのは、お互いに変ってないということやね」と自己満足したあと、どちらからもなく「ちょっと太っただけやね」と補足がついた。20年前、私は夫と子づれ、彼女は浮き世ばなれのした成績抜群のハイ・ミスだった。今は年下の「売れない詩を作る、才能ある詩人」と結婚して8才の娘がいるという。評論家で編集者の彼女インナ・ロストフツェワとは、その後も何度か会場で会った。

モスクワでの円卓会議が一応終った12月2日夜、参加者はいくつかのグループに分かれ、私たちはフィンランド、ポーランド、ユーゴ等の人たちとともに、空路モルダビアの首都キシニョフに入った。そこはプーシキンが流されて青春時代を送ったゆかりの地、ソ連邦を形成する15共和国中唯一のロマンス語族の



モルダビアの農家で挨拶する詩人（筆者撮影）

国で、人口390万、国章にまで房の絵が描かれたぶどうの名産地である。

一夜あけて民族友好協会でのすてきな女性議長歓迎会、モルダビア作家同盟での懇談会、郊外に出た帰りにたちよった農家（酒造工場は申すにおよばぬ）、どこでも朝から“お茶がわり”に新鮮なぶどう酒がなみなみと注がれるのには、有難いやら困るやら。

プーシキンが客として滞在した遠い郊外の邸宅は、見晴しのよい丘の上であり、雲一つない冬の空の下、樹という樹すべて落葉しつくしてなお見事というほかない景観であった。

ここでは文芸誌もモルダビア語とロシア語の両方で出版される。3日間つきまりで案内してくれた、中央とはひと味違う素朴で且つ



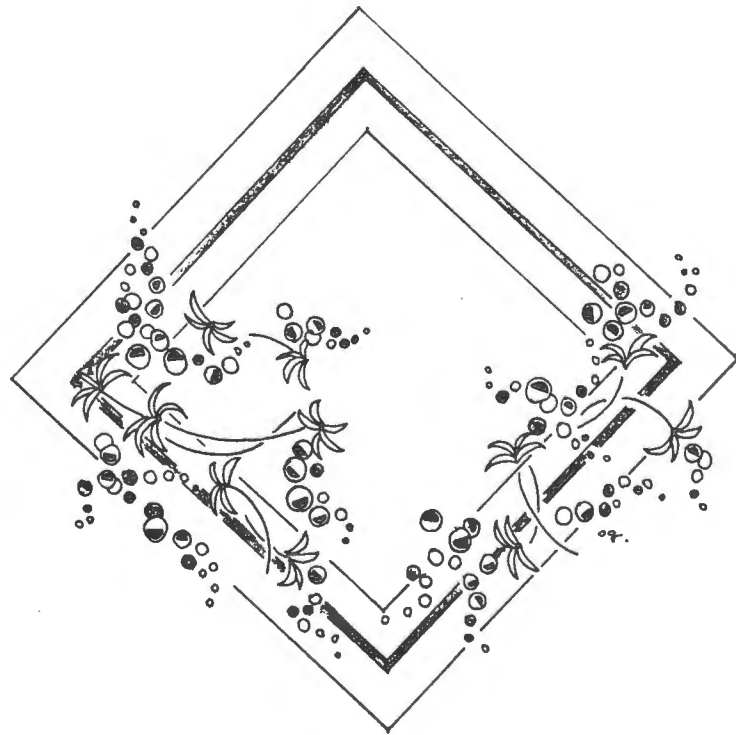
エフトウシェンコ（中央）と筆者（右）

南欧風な詩人や小説家たちも、おおむねバイリンガルで、言語をえらんで創作する。「翻訳問題」はソ連ではまず大切な国内問題でもあるわけだ。

3日後、皆つきぬ名残りをおしんで、買ったり贈られたりした本とともにキシニョフを去った。

モスクワ最後の夜は、ソ連の有名な詩人た

ちと各国翻訳者たちの、交歓朗読会があり、そのあと私たちは、最近小説も書いて日本で訳してもらいたがっているエフトゥシェンコに深夜までひきとめられて、くたびれの総仕上げをしたが、ともかく12月7日夜、霧にもめげぬアエロフロート機はぶじにモスクワを離陸して、私のいささか感傷旅行的出張は終了したのであった。 (ロシア語)



ゲッティンゲンへの車中にて

大河内 了 義

て友人に連絡したあと、駅のレストランに入ってビールを注文して新聞を開いた。与党の敗北、政権交替という結果になった総選挙の直後だけに、記事には事欠かない。間もなく10分ほど遅れて入ってきた次のインターシティーに乗って、窓外の早春を楽しむこととなったのである。

ところがハノーファー駅に降りてみると、車内放送によると私の乗り換えるべき列車の発車するはずの10番ホームに到着してはいないか。一体どうなっているんだ、こんないい加減なことは20年前、いや10年前ですら考えられなかった、と再びむしゃくしゃしてくる心を押さえ、掲示板を見て乗り換えホームを探していると、同じ列車から降りたらしい人品いやしからぬ、しかしどことなく高慢ちきな老人が大声で駅員につっかかっている。以前の規律厳格なドイツ国鉄を知っているはずの老人ならばさもありなんと半ば同情しつつ乗り換えホームにたどりつき、すでに入っているゲッティンゲン行きに乗り込み、入口に一番近い車室におさまった。例の老人も続いて入ってきて私の向い側に腰を下ろす。汽車が動き出した途端に老人が口を開いて、「お前は日本人か？」面相からしていつも南方系に見られていた私が、ホー珍らしいことだナと思ってうなづく、「日本人はわれわれの科学や技術を盗んで物真似ばかりし、今や輸出攻撃をかけてきているが、独創的な発明は何一つしとらんではないか！」とのたもう。ほらきおったナ、と思った。というのも、経済状態の悪化、失業率の増大、マルクの下

1983年3月の末、オランダのライデン大学で3週間の集中講義を終えた私は、ゲッティンゲンの友人を訪れるべく、ハノーファー経由ハンブルク行きのインターシティー急行列車にゆられていた。例年よりも春の訪れが早かったせいか、オランダでもチューリップがすでに綻びかけていたが、車窓から見えるここ北ドイツ低地の牧草地にも、もううっすらと緑が萌えはじめていた。人間精神のありよりの短時間の間にひどく変るのに、自然の方は、人間が破壊しない限り、悠久の営みを繰返してくれぬのかと、今更のごとく想い至って、先ほどの腹立たしさも少し忘れ、流れ去る窓外の景色を眺めていた。

先ほどの、というのは、その前日エンゲルス生誕の地で知られるヴッパータールの友人オッテ家に泊めてもらったのだが、念のため翌日の汽車を電話で確めてから駅へ来たところ、予定の列車が来ない。ホームで待ちあぐねているほかの乗客もいら立ちはじめ、駅員にたずねたところ、「その汽車は今日は走らない」というそっけない返事だ。一人の老婆は、ビーレフェルトの駅でもう息子が待っているのに、とおろおろするし、初老の紳士は「今朝確認した上で来ているのに、今日は走らないとは何事か！」といきまく始末。

ここ数年西ドイツで汽車に乗るたびにほとんど毎回のようになにかの不愉快さを味わわされて慣れっこになっている私は、走らないと言うのならしょうがないや、1時間あとの汽車に乗ればいいやと肚を決め、再び重い旅行カバンを引きずって電話ボックスを探し

落などの結果であろう、自分たちの怠惰や傲慢を棚にあげて、外国人を非難する傾向が西ドイツにおいてもこの数年かなり顕著で、以前の理由定かならぬ親日感情も大分あやしくなってきた、経済などとはまるっきり無関係な学会などでも、日本人に対する風当たりがかなり強くなっているのを感じ始めていたからである。一たんは、「盗んだなどは人間きの悪い、高い金を拂って学んだのだ、それにあんたはんらは独創的独創的といばり散らさるけん、模倣のない独創などというものがあるのなら見せてもらいまひょか!」と切り返えそうかと考えたが、何せドイツ人と議論するには第一体力が要る、第二に時間がかかる。こちらは些か疲れているし、それにあと40分もしたら降りなければならぬ。癪にさわるがここは一つドイツ語のわからない振りを決めこもう。ところがあいにくわかつちゅうだナ、むっとした表情が面に現れたのだろう。「大体だナ」と老人は言いつのって黄禍論にまで及ぼうとする。

それまで私の筋向いの窓側にかけて老人と私をかわるがわる見つめていた30代半ばと覚しき青年が、突然老人の方に向き直って言った——「いい加減にしたらどうですか! 先ず第一に外国からの客人に失礼ではないですか。第二に」と言いつのって私の側の窓際に坐っている中年の女性を指して「ご婦人にいやな想いをさせているし、第三に私自身大変不愉快です!」老人はなおも、言いたいことを言うのが何が悪いのかなどと悪態をついていたが、やがて「アウフ・ヴィーダーゼーエン」(じゃな)と言って隣の車室に移って行った。足の不自由なところを見るとひょっとしたら戦傷者かなという想いが私の心をチラッとよぎった。

礼を言う私に青年はにこやかに答えた——自分はベルリンに住んでいるが、そこでも外国人、とりわけトルコ人に対する差別や憎しみがひどい、電車の中などでトルコ人の娘が大勢のドイツの若者にとりかこまれて、始めは言葉でののしるだけだが、やがて髪を引っぱったり胸に触ったりする。何よりも悪いのは、ほかのドイツ人乗客が見ぬ振りをして何もしない。あるとき自分は、こういうときは黙ってはいけなと心に決めた、われわれはつい40年ほど前にユダヤ人に対してやったのと同じことをまたぞろ繰返えしているのではないかと気がついたからだ。今の老人は2度も戦争を、またあのナチスの時代を経験しているのに、そのことから何も学んでいない、情ないことだ、外人労働者がドイツ人の職場を奪っていると言われるけれども、20万に近い外人労働者を呼び寄せたのはわれわれ自身だということを誰も言わない……。 「しかし少くともあなたは過去から学んでいるではありませんか」という私に対して彼は、ほとんど悲しげに「私は少数者の一人です」と答えた。私は、歴史教科書問題、防衛費支出、不沈空母発言など日本の事情を話したかった。しかしすでに列車は徐行しはじめている。

「緑の党」の「成長を期待して」投票したという二人に心を残しながらさよならを言って立ち上った私の眼には、停車寸前の窓を通して、養女にした南米の孤児ニーナとカトリンの二人を連れて迎えに来てくれているクラウスの姿がチラッと見えて後ろへ過ぎ去っていった。(ドイツ語)

米国南カリフォルニア大学滞在を終えて

—計算機科学の専門・一般教育—

田中克己

私は1982年3月から1984年1月まで、米ロスアンゼルス南カリフォルニア大学(University of Southern California, USC)の計算機科学科に客員研究員および非常勤講師として滞在しました。この大学は、創立以来すでに100年を経た私立大学で、学生数約26000、UCLAとともに当地の代表的な大学の一つです。(日本ではUCLAの方が知名度が高いようですが、当地では、相当ライバル意識が強くいろいろな面で張り合っています。)場所はロスアンゼルスダウンタウンに近く本年のオリンピックのメインスタジアムになる予定のコロシム競技場がすぐ近くにあり、治安の面では、あまり安全とは言えずそのため大学の中をSecurity Policeが絶えずうろうろしています。大学当局から回って来る回覧によると、これでも最近ましになって来たとかで、ここ2、3年キャンパス内で殺人事件が一度も無かったことを自慢していました。

計算機科学科は、1976年に創設され、現在教授4、准教授1(日本の大学の助教授にあたります)、助教授12(日本では助手レベルがこれにあたります)の計17名で比較的小規模な構成です。この学科は主に計算機の理論関係の人やソフトウェア工学の人が多く、計算機のハードウェア関係の人は、電子工学科に属しています。従って、計算機の論理回路などの講義は、計算機科学科にはありません。

まず最初に驚いたのは、開放的な土地柄もあってか、学生も先生も大層行儀が悪いことです。コーヒーを飲みながら受講する学生が

いるかと思えば、机の上に足を放り上げて講義する先生もいます。服装も極めていい加減で、ネクタイを締めている先生は殆どいません。もう一つ驚いたのは、講義の学生の出席率が非常に高いことです。また、日本の学生と違い授業中の態度は活発で、頻りに質問や議論をします。

昨年の春学期(1月~5月)と秋学期(9月~12月)に、学部向けの講義を持ってみたいと言われ、これは良い経験と思い担当しました。私の講義は「データベースシステム設計」という科目で、理論と実際とを適当なバランスで講義し、さらに学生にはプログラミングの課題が2つ与えられるというものでした。(データベースシステムとは、計算機に多くの利用者のデータをまとめて蓄積したものから、効率良く必要なデータを取り出したり修正したりしてくれる大規模なソフトウェアです。)最初は、とても他の先生のように流暢には喋れられないので不安でしたが、このことを聞いてみると、「絶対に早く喋ってはいけません。『外国人』が多いから出来るだけゆっくりと大きい声で!」とアドバイスされました。実際、私のクラスを見てみるとアジア系や中東系など『外国人』が大変多く更に彼らも凄いいい発音で英語を喋るので、私も変な自信が湧きました。電話帳の半分ぐらいの厚さの講義ノートを用意したところ、これが結構好評で(学生には一部10ドルで売りました)、こちらも黒板にあまり書かなくてすむので重宝しました。日本の大学と違って、博士課程の学生がTeaching Assistantとし

て働いてくれるので、レポートの採点や提出されたプログラムの採点等に時間をとられないので助かりました。週に6時間ほどOffice Hourをとり、学生の質問や相談にのったりするシステムになっており、出来の良い学生も出来の悪い学生も大層頻りに質問や文句を言いに来ました。出来の悪い学生の自己主張（彼らは最善をつくしたとはしばしば言いますが絶対にI'm sorryとはいいません）には付き合ってもらえませんが、それ以外は、学生とのDiscussionはなかなか楽しいものでした。私の講義は宿題も多く、学生に言わせると結構Hardだったようです。プログラムの締め切り間際になると徹夜で学科の計算機を使って一睡もせずに私の講義に出て来る学生も結構いたようです。良く言われることですが日本の学生は高校を出るまではとても良く勉強するのに、大学にはいると急に勉強量が落ちるようです。アメリカの大学は入学が簡単だが卒業するのが難しいと言われます。どちらか良いのかは難しいところですが、徹夜徹夜が続いても充分耐えるだけの体力がついてから大学でしごくアメリカのやりかたは学ぶべきところがあると思います。もう1つ面白いことは、講義も最後の頃になると、かなり詳細なチェック事項を満載した、先生の評価アンケートを学生側でやります。例えばこの先生は講義中に学生との対話をちゃんと行なったか？とか、講義の準備は熱心にやっていたか？などというものです。このアンケートの結果は後で大学当局の方に送られることになっており、後日、本人にもその結果が知らされることになっています。

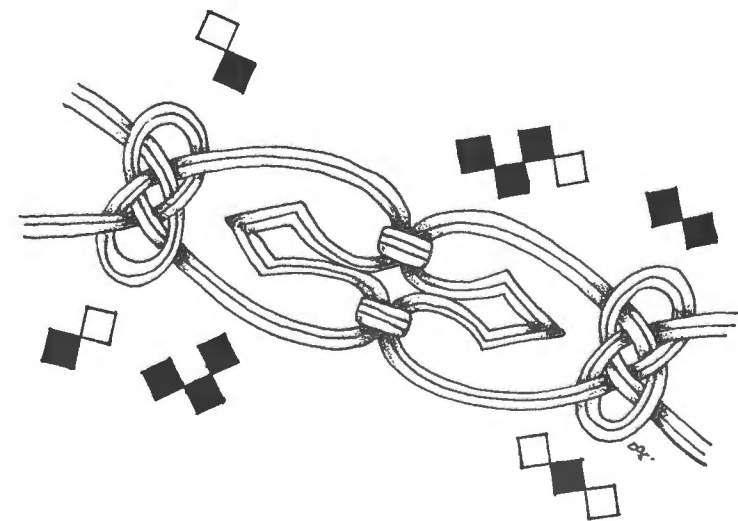
アメリカの大学での一つの大きな動きとして、パーソナルコンピュータの導入が盛んに

なって来ていることがあげられます。いわゆる、Computer Literacyということで、専門的な計算機教育ではなく、一般向けの情報処理教育を大量のパーソナルコンピュータを導入してやろうというものです。ピッツバーグのカーネギーメロン大学では1985年から新入生全員にパソコンの購入を義務づける計画だそうです。あと2、3の大学でも同じような計画があるそうで、また、すでにこれを始めているところもあります。テレビのニュースで、新入生が入学手続きを終えた後各自がパソコンをかかえて出ていく風景を写し出していました。メーカーと大学との関係もかなり密接で、カーネギーメロン大はIBMとこのためのパソコン開発に関して契約を結んでおり、いまよりもかなり高性能のパソコンを3000ドル程度の価格で提供する予定とのことです。（3000ドルは高く思えるかもしれませんが、アメリカの授業料は結構高く、私の行っていた大学では、1学期で約4000ドルもします。また1ドルは100-130円ぐらいの感覚です。）もちろん、大学内のいくつかの大型計算機同士はネットワークで繋がれ、学生のパソコンもこのネットワークに結合して使用できます。パソコンの使用目的は多様でしょうが、(1)ワードプロセッサとしての利用、(2)一般情報処理教育、(3)ネットワークによる文書の通信（例えば宿題やレポートのやりとり等）、(4)各種専門分野でのコンピュータを用いた教育、などに威力を発揮すると思われる。また、このような計画が軌道にのれば、大学の各学部において専門的な、しかも流通性の高いソフトウェアが大量に作成され、蓄積されてくることでしょう。日本の国立大学ではこのような思いきったことはなかなか出来そうにありません。

南カリフォルニア大でも上記のようなことをやろうという動きも無い訳ではありませんが、専門の計算機科学科の人達はあまりこのことに関しては積極的ではありません。一般の情報処理教育となれば、大量の学生を相手にしなければならず、とてもそんなことまでやっている暇は無いというのが大勢の意見です。しかし、これとは別に、計算機科学科の専門教育にパソコンを積極的に使っていくという試みが昨年からは始まっています。修士課程のソフトウェアのいくつかのコースでは結構大規模なプログラムを実習として作らせていました。こまわりの効くパソコンを用いたこのような実習は、単なる講義だけに比べると理解を深めるには大変有効だと思います。

約2年ぶりに帰って来た日本では、以前にも増してパソコン・ブームのように見受けられます。神戸大学の周辺のいくつかの私立大学にもすでにパソコンの導入が行われているそうです。そこで、今後、このような一般情

報処理教育を一体誰がやるのかということが、多かれ少なかれどこの大学でも大きな問題になると思われます。また、さらに重要で、議論が必要なのは、一般情報処理教育の中身をどうするかということです。単に機械やプログラミング言語の使い方を教育しても、それは手段にすぎず、本来の目標は計算機を援用した問題解決能力の育成が最も重要に思われます。（例えば、単にBASICやFORTRANを知っていたり、パソコンの使い方を知っていても、それだけでは通用しない社会にすでになっていると思います。）それでは何と何を教えれば充分なのかと言われれば、これまた難しい問題です。しかし、少なくとも、計算機科学や情報科学（又は工学）の成果で、専門家から一般のレベルに開放できるものはどんどん開放し、また、それを入門的に分り易く教育していく必要があると筆者は考えています。（情報科学）



「甘えの構造」を読んだ感想

「甘えの構造」を読んで、次の一句は私にとって、非常に印象深かった。

あまえという語が日本語に特有なものでありながら、本来人間一般に共通な心理的現象を現わしているという事実は、日本人にとってこの心理が非常に身近なものであることを示すとともに、日本の社会構造もまたこのような心理を許容するようにできあがっていることを示している。

アマエという言葉が日本語に特有なものであるかどうかは知らないが、私は、甘えの心理が二通りに分けられると思う。第一には、前に引用したもので、本来人間一般に共通な心理的現象である。例えば、小さい子供が親に抱かれることや、病気にかかった人が親しくしてもらいたい気持などがこれである。第二は、一般に対しての特有なもので、もっと深く分析しなければならないものである。アマエという特有な言葉を持つ日本語のような言語が日本のような社会の中に存在することである。アマエという語があるからこそ、その民族の中でアマエの心理が近く感じられる。言語がまだそんなに発達していない昔、日本のような社会の中で、何かのものが人々の精神構造をよく現わしていた。あとになって、その何かのものにアマエという名をつけた。そして、今になって、日本人、あるいは日本人のような他の民族の間で、特有なものとなった。もちろん「日本人のような他の民族」というのは、日本と全く同じではなく、一部だけについて言っているわけである。

それに関しては、「すまない」という言葉を思い出した。「すまない」は謝罪と感謝という一見異なる状況いずれに際しても使われる言葉である。私の所の方言には、「すまない」と全く同じ単語がある。それは「nán wéi」(難為)というのである。ちょうど土居先生が指導する人に親切なことをしてもらった時に、お礼として“I am sorry.”の意味と同じである。つまり、相手に何かのことをさせて、迷惑をかけたことに対する詫びを申しあげる言葉である。私の故郷の人々は、他人に仕事をたのんだ時、あまり“謝々!”と言わないのである。その代わりに“難為!”とまるで謝罪のように言うのである。不思議なことに、故郷を出る前に、他人に仕事をたのまれた場合、“謝々!”というお礼の言葉を聞いたこともなかったようである。

それは私の出身地の具合であるが、ほかの中国の地方ではちがうかもしれない。

以上のことに対して、日本人に特有の甘えの心理の一つは、次のことから見られると思う。

私は先輩Aさんがいる。そして、Aさんは日本人のチューターBさんがいて、Bさんと同じ研究室に日本人のCさんがいる。

ある日、次のようなことがあった。

ふだん、あまり他人に質問したくないAさんはBさんがいない時、Cさんに質問した。すると、CさんがAさんに説明するうちに、Bさんが研究室に入ってきた。AさんとCさんを見て、非常にうれしくなかった。それ以後、BさんがAさんに前ほど親しくなくなっ

たとAさんが私に言った。

結果はどうなっていくかはべつとして、Bさんの態度が変わったことから、甘えの心理がはたらいっていることが思える。Aさんの質問に答える権利が自分にしかないと思っているBさんにとって、その権利を失うと、当然うれしくなくなる。つまり、Bさんは、Aさんに教えてあげてをひとつの甘えだと思っていた。

しかし、私、あるいは、一般の中国人にとっては、だれでもAさんに教えることができる。特に、私は、他の人が教えてあげるほうがありがたいと思う。

そのようなことは日本人独特の甘えの心理だと思っただけである。日本へ来て、たくさんの不思議なことに会ったが、少し深く分析すれば、甘えの心理が見えるかもしれないが。このへんでおわる。



昭和59年度前期学年暦 昼間課程用

4	10	火	入学式、新入生修学指導。	5	14	月
	11	水	1年生クラス分け発表。2年生 授業開始。2年生学業成績表、 授業時間表、講義要項配布。		15	火 本学創立記念日(休業)
	12	木	1年生授業開始。		16	水
	13	金			17	木
	14	土			18	金
	16	月			19	土
	17	火			21	月
	18	水			22	火
	19	木			23	水
	20	金			24	木
	21	土			25	金
					26	土
	23	月	} 2年生「履修・受験届」用紙配 付及び受付。		28	月
	24	火			29	火
	25	水			30	水
	26	木			31	木
	27	金		6	1	金
	28	土			2	土
	30	月			4	月
5	1	火			5	火
	2	水			6	水
	3	木			7	木
	4	金			8	金
	5	土			9	土
	7	月			11	月
	8	火			12	火
	9	水	} 1年生「履修・受験届」用紙配 付及び受付。		13	水
	10	木			14	木
	11	金			15	金
	12	土			16	土

6	18	月		9	14	金
	19	火			15	土
	20	水			17	月
	21	木			18	火
	22	金			19	水
	23	土			20	木
	25	月			21	金
	26	火			22	土 授業終了。
	27	水			24	月
	28	木			25	火 前期定期々末試験始まる。
	29	金			26	水
	30	土			27	木
7	2	月			28	金
	3	火			29	土
	4	水			10	1 月
	5	木			2	火
	6	金			3	水
	7	土			4	木
	9	月			5	金
	10	火			6	土
	11	水	夏季休業開始。	}	8	月 試験終わる。
	12	木			9	火
	13	金			10	水
	9	7	金	}	11	木
	8	土			12	金 進学判定会議。
	10	月	夏季休業終了。		13	土
	11	火			15	月 進学者発表。前期終了。
	12	水				
	13	木				

昭和59年度前期学年暦 第二課程用

4	10	火	入学式、新入生修学指導。	5	14	月
	11	水	授業開始、成績発表、授業時間表・講義要項配布。		15	火
						火
					16	水
	12	木			17	木
	13	金			18	金
	14	土			19	土
	16	月			21	月
	17	火			22	火
	18	水			23	水
	19	木			24	木
	20	金			25	金
	21	土			26	土
	23	月	履修・受験届用紙配布及び受付。		28	月
	24	火			29	火
	25	水			30	水
	26	木			31	木
	27	金				
	28	土		6	1	金
					2	土
	30	月			4	月
5	1	火			5	火
	2	水			6	水
	3	木			7	木
	4	金			8	金
	5	土			9	土
	7	月			11	月
	8	火			12	火
	9	水			13	水
	10	木			14	木
	11	金			15	金
	12	土				

6	16	土		9	11	火
					12	水
	18	月			13	木
	19	火			14	金
	20	水			15	土
	21	木			17	月
	22	金			18	火
	23	土			19	水
	25	月			20	木
	26	火			21	金
	27	水			22	土
	28	木				前期授業終了。
	29	金			24	月
	30	土			25	火
						定期期末試験開始。
7	2	月			26	水
	3	火			27	木
	4	水			28	金
	5	木			29	土
	6	金				
	7	土			10	1
						月
						同上 終了。
	9	月			2	火
	10	火			3	水
	11	水	夏季休業開始。補講日。		4	木
					5	金
					6	土
					8	月
					9	火
					10	水
					11	木
					12	金
					13	土
9	8	土	補講日。		15	月
	10	月	夏季休業終了。			

人事異動

58. 11. 1	教務掛文部事務官	高鍋文一	入学主幹教務掛へ(併任)
58. 11. 16	仏語教授	山口俊章	昇任
"	英語助教授	森本まゆみ	"
59. 1. 1	数学教授	宇磨谷教明	"
"	独語助教授	栴田義一	"
"	保健体育助教授	天野郡壽	"
59. 4. 2	経済学教授	向井利昌	4月1日限り停年退職
"	数学教授	請川高三郎	"

学生自治会との交渉経過

11月2日 場所：A棟1階応接室

出席者

学生側：自治会委員長および自治会委員数名

大学側：山中保人学生委員長ほか学生委員全員

交渉内容：六甲祭のための休講措置、車輛規制、設備改善等について。

なお10月19日、A棟1階応接室において六甲祭について六甲祭教養部実行委員との交渉もあった。出席者：学生側：六甲祭教養部実行委員長ほか実行委員数名。大学側：山中保人学生委員長ほか学生委員全員。

なお11月21日下記の願いが提出され、12月7日の教授会において事後承諾された。

1983年10月28日

教養部長殿

教養部自治委員会

自治委員会との交渉を11月9日の教授会以前で出来るだけ早期に
下記の内容で持って頂きたく申請いたします。

記

一、 11月14日 1、2限の休講措置

一、 今度の単車の規制で生じた種々の問題のこと

一、 交通規制について、学生の意見を集約し、又学生自治会として協力してゆける準備のための時間をとりたいので、実施が10月31日にされる規制措置について、延期をして頂きたいこと。

一、 学生の意見を最大限に尊重し、その措置に反映させて頂きたいこと。
なお誠に勝手ながら、交渉が10月中に持って頂けない場合は、11月におけるそれまでの期間の措置の執行を猶予して頂けるよう御高配願います。

昭和58年11月21日

神戸大学教養部長

長谷川正知殿

神戸大学教養部学生自治会

代表者氏名

学生大会開催許可願

下記により開催したいので、許可下さるようお願いいたします。

記

- | | | |
|----------|---|---|
| 1.日 | 時 | 11月29日(火) 3、4限 |
| 2.場 | 所 | B110 |
| 3.参加予定人員 | | 約400名 |
| 4.議 | 題 | ×単車交通規制の問題をめぐる討議
×平和学講座開設に向けての討論
×新入生歓迎行事
×その他 |
| 5.そ | の | 他 |
- 備考 1. 許可願は、開催する7日前までに教養部学生掛、学生委員を経て教養部長へ提出して下さい。
2. 学外者が参加する場合はその旨を5の欄に記入して下さい。

第二課程学生自治会との交渉経過

(1983年10月28日～1984年1月31日)

10月28日 83年度Ⅱ課程祭要求書を受理。(注1)

11月8日 Ⅱ課程祭予算、休講措置、物品援助について話し合い。

11月15日～19日 Ⅱ課程祭行事実施される。

(注1)

要 求 書

神戸大学教養部殿

例年同様本年度もサークル連合とⅡ課程自治会が中心となってⅡ課程祭実行委員会を設置し、委員長(法Ⅱ、2回生)を選出しました。

今年度も厳夜祭という名称で11月16日(水)より、11月20日(日)にかけて各種催しを行いますので、貴学部よりの資金面、現物支給での援助をお願いいたします。

記

1. 日程について

11月16日(水)	スライド講演会
17日(木)	スポーツ大会(雨天の時バレーボール)
18日(金)	講演会
19日(土)～20日(日)	オールナイト企画(コンパ、もぎ店、映画、他)

2. 使用教室等の許可願いについて

11月16日(水)	Ⅱ課程生用施設(19:00～)
17日(木)	教養部グラウンド(18:30～22:00) 教養部体育館(18:30～22:00)
18日(金)	Ⅱ課程生用施設(19:00～)
19日(土)	Ⅱ課程生用施設 B101、B102、B103、B104、B109 休養室

3. 予算援助について

これを自治会とサークル連合の一環した活動として行ないます。そこで貴部から金130,000円の援助をお願いしたいと思います。尚、明細については次項に記載します。

・支出について

ポスター代(校費)	60,000
映画代(自治会)	60,000
講演料(自治会)	10,000
計	130,000円

・現物支給について

ファックス原紙(Tosha Fax Stencil Sheet)	2シメ
ホリスタンダートインキ 黒 中性400g	10本
中質紙	8シメ
ポスターカラー(大)	赤2個 青2個 黒1個
コピー用紙(プラスB4)	3シメ
コピー液(プラス現像液11)	1個
模造紙	100枚
セロテープ	3巻
ガムテープ(布)	3巻

1983年10月28日

Ⅱ課程祭実行委員長

Ⅱ課程サークル連合委員長

教養部第Ⅱ課程自治会委員長

部落解放研究会との話し合いの記録

(1983年9月21日～1984年1月31日)

- 9月21日 「人権」総括につき交渉要求書受理(注1)
- 10月5日 第1回交渉(人権ならびに障害者の市バス乗車問題について)
- 10月11日 次回交渉要求書受理(注2)
- 10月18日 第2回交渉(障害者の市バス乗車問題について)
- 10月28日 第3回交渉(前回交渉の継続)
- 10月31日 市バス乗車問題についての「部長見解」掲示
- 11月7日 次回交渉要求書受理(注3)
- 11月10日 第4回交渉(「人権」総括について)
- 11月19日 11月7日付要求書についての回答文書呈示(注4)
- 11月24日 第5回交渉(「人権」総括)(注5)

(注1)

要 求 書

1983年9月21日

神戸大学教養部長殿

神戸大学部落解放研究会

総合科目「人権」が開講されて、はや5年が経過しました。78年2.10差別事件糾弾闘争の中で、自己批判作業を前提として、教養部総体として部落差別にどういう態度をとって行くのか、を不断に問うてきたこの5年間、一体どういう前進点があり、どういう課題があるのか、を明らかにしなければならないと思います。

中曽根を先頭とする今日の戦争突撃政権は、自衛隊増強、日韓米三国安保の形成、天皇(制)の前面へのつきだし、と、いよいよ“いつでも戦争をおこせる状況”をつくりだしてきています。それは、とりもなおさず差別主義・排外主義攻撃の激化として進められ、「浮浪者」虐殺にみられるように、人間を人間としてみず、平気でなぶり殺せる中学生が必然的にできています。まさに、関東大震災のときに、政府の差別主義デマ宣伝によって、日本人が朝鮮人を大量虐殺していき、また“第二次世界大戦”においては、天皇の名の下に、数千万のアジア人民を虐殺していった、その構造が、今、作られていることを、危機感をもってつかんでおかなければなりません。

そのような状況の中で、この教養部においても、81年4.12差別落書、天皇主義ファシスト＝反憲学連の登場など、ファシズムが台頭してきています。

そのことをふまえて、教養部における解放教育確立の努力が一体どれほどの成果と力をもってきているのかについて、真剣にとらえ返し、今後の展望をだし切っていかなければならないと思います。

つきましては、以下のように、貴当局との交渉を要求します。

- 一、 日時 9月26日(月)～10月8日(土)
- 一、 場所 教養部内
- 一、 内容 (一) 総合科目「人権」について
 - (1) 5年間の総括
 - (2) 来年度方針-中・長期計画(二) その他

なお、日時・場所については、後日、相互の確認の下に決定したいと思います。

以 上

(注2)

要 求 書

1983年10月11日

神戸大学教養部長殿

神戸大学部落解放研究会

去る10月5日、我々は、貴当局と(1)総合科目「人権」について、(2)9.21「障害者」に対する市バス乗車拒否問題について、交渉をもちました。その中で、解放教育の確立に向けた貴当局の五年間の取りくみが、真に部落大衆・「障害者」大衆・在日朝鮮人大衆の立場に立とうとしたものなのかどうか、を巡って、深く徹底的に総括しなければならないことを確認したと思います。さらに、9月21日、総合科目「人権」に参加しようとした「障害者」Tさんに対する神戸市バス乗車拒否の問題と、Tさんへの脅迫状の問題については、「障害者」の生命を否定する差別抹殺行為であり、絶対許すべきではない、という共通認識に立ったと思います。

この交渉の上に立ち、以下のことを要求します。

- (1) 10月14日までに、“9.21「障害者」に対する市バス乗車拒否問題”に対する抗議声明案を我々に提出し、10月18日に、それに関する交渉をもつこと。
- (2) 10月24日までに、総合科目「人権」についての第一次総括文書を我々に提出し、10月28日に、交渉をもつこと。

以 上

(注3)

要 求 書

1983年11月7日

教養部長 長谷川正知殿

神戸大学部落解放研究会

今年度にはいって、総合科目「人権」の総括と方針に関わる交渉を、すでに三回行なってきました。その中で、

総括の視点をめぐっては、総合科目「人権」が部落民・「障害者」・在日朝鮮人学友にとって一体いかなるものとしてあったのか、をまず第一にすえなければならないこと。その意味で、一回一回の講義の中で差別的な発言がそのまま放置されようとした現実に端的に示されるように、被差別学友にとって苦痛な時間であり、とても解放教育とは言い難いこと。しかも、一般学友にとっても、単に「知識」を得る場に終わろうとし、かつ、一部の学友の問題にしかかっていないこと。

このようなことを、自己批判的に認識してもらえたと思います。

そういう意味では、この五年間、総合科目「人権」が教養部の中である程度定着してきたとはいえ、内容的には、決定的不十分性を持ち、そのほかにも、様々な課題が山積みされていると総括しなければなりません。

この総括の上に立ち、私たちは以下のことを要求します。

- 一、 時間数について、前期は二限連続でコマをとり、後期はそれを引き継ぐ形で一コマとする。
- 一、 講師については、実践的に差別と闘い、被差別大衆の自主的解放運動を受講生に伝えられる人を招くこと。
- 一、 世話人・講師と我々との間で「人権」の内容・進行方法を巡って協議できる場を保障すること。
- 一、 次回交渉を11月10日（木）にもつこと。

以上

(注4)

回 答 書

1983年11月19日

神戸大学部落解放研究会殿

神戸大学教養部長 長谷川正知

11月7日付要求書について下記のとおり回答します。

記

1. 総合科目「人権」を前期2コマとすることは来年度については困難である。
2. 来年度については「人権」1コマのほか、人権に関する特講1コマを開講することを考えている。
3. 総合科目「人権」および人権に関する特講の開講曜日および時限については、担当講師の都合および学生の受講上の便宜を考慮して今後早急に検討して具体化したい。
4. 人権に関する講義の運用についてはこれまでの交渉の経過を踏まえていっそうの充実を期したいと考えている。

以上

(注5)

11月24日最終合意文

総合科目「人権」について

昭和54年以降、毎年、総合科目「人権」の最終授業時における担当者、受講者の討議を踏まえて、担当者代表、八人委員会で問題点が検討され、その結論が教養部長に報告されてきた。この経過に即しつつ過去5年間の実施状況が、各年次担当者代表、八人委員会の検討を経て総括され、ほぼ次の如く報告された。

1 総合科目「人権」は、教養部における昭和53年2月の部落差別文書事件を契機に、教養部において、それまで制度的措置にもとづく具体的施策が何ひとつ行なわれてこなかった事実への深刻な反省に立って発足した。人権は差別問題の科学的究明とそれにもとづく積極的な施策

の基軸をなすものであって、総合科目「人権」は一連の施策のうち、学生の関わりの中で特に大きな意義を持つものである。

2 昭和54年、「人権」開講に当たり、部落差別をはじめとするもろもろの差別を認識し、その解消を期するのは教養部自身の問題であるとして、可能な限り教養部内から「人権」担当者を出すことになった。しかし担当者、受講者の討議の過程で、主題が多岐に亘り、全体として総花的、断片的であること、講義が往々にして一般的、抽象的で、感銘に乏しいこと等の批判を受けた。これを含め、実施上の諸問題が担当者及び八人委員会において討議、検討された。

3 昭和55年の「人権」は、上記の総括の上に立って主題を部落差別、障害者差別、民族差別に限り、それぞれ実践体験の豊富な担当者を教養部外から招聘し、次年度以降もその方式に従っている。

また同じ昭和55年に「朝鮮史、朝鮮事情」が開講され、「人権」の関連科目としてこれを強化する意義を担い、現在に至っている。

しかし「人権」に対しては、三つの主題を関連させ、それぞれを全体の中に位置づけるべき総合的理論に欠けるという批判があがり、担当者との折衝、八人委員会での検討を経て昭和56年から、人権と差別に関する総論を講義全体の冒頭に設けることになった。

4 以上の如く「人権」は担当者と受講者の討議を踏まえ、年毎に内容の充実への努力がはられ、講師の先生方の熱意と相まって、当教養部における差別問題への取組みの重点施策として定着するに至っており、人権問題の啓発という点で一定の役割を果していると考えられる。

しかしながら、社会の仕組みに深く根ざす差別意識がこれらの施策によって一挙に解消し得るものとは到底考えられない。

事実、受講生の数も限られており、また受講生の中には単位取得のみを目的とする者など、「あらゆる差別的偏見からの解放と批判精神の函養」という当初の目標からは程遠い者も見受けられる。これらは不十分な点として謙虚に反省しなければならない。

以上の総括を踏まえ、我々は今後とも担当講師の先生方と受講生との討議の上に立って更に改善を重ね、ねばり強く差別解消への努力を積み重ねて行く決意である。

